

開会挨拶

NHK 大阪放送キャスター 総合司会 添田 尚子

本日は防災教育推進フォーラムにお越しいただきまして誠にありがとうございます。只今から文部科学省、大阪管区气象台、大阪府、NHK 大阪放送局の共催、内閣府の後援によります防災教育推進フォーラムを開催いたします。私、本日の司会進行を承りました、添田尚子と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

皆様には受付で質問書とアンケートをお渡ししている事と思います。質問書は基調講演のあとの休憩時間に係の者が回収させていただきます。また受付にも回収ボックスがございますのでそちらでも回収をお受けいたします。またアンケート用紙はフォーラムの終了後、出口にございます回収ボックスに入れて頂きますようよろしくお願いいたします。

それではフォーラムの開会にあたりまして、文部科学省研究開発局よりご挨拶をさせていただきます。本来であれば地震防災研究課長、増子宏より挨拶すべきところですが、急遽、国会審議の対応が入りましたので、防災教育担当課長補佐の滝 明よりご挨拶させていただきます。

文部科学省研究開発局 防災教育担当 課長補佐 滝 明

只今、ご紹介に預かりました文部科学省研究開発局、地震防災研究課の滝と申します。本日はよろしくお願いいたします。地震防災研究課長の増子に代わりまして、ご挨拶させていただきます。本日はご多忙の中、当防災教育推進フォーラムにご参加頂きまして、誠にありがとうございます。

本日の「防災教育推進フォーラム 東南海・南海地震の脅威に備える～地域と学校で「防災力」を高めよう～」の開催にあたりまして一言ご挨拶申し上げます。皆様ご承知の通り、我が国はその地理的な状況から世界有数の地震国であると共に、その他の自然災害としまして風水害、火山災害等これまで数多く発生し、災害による大きな被害を受けて参りました。昨年 6 月も岩手・宮城内陸地震の発生などと、ご記憶のことと思います。今世紀前半には南海・東南海、南海地震とそれに伴う津波の発生が確実視されており、この大阪におきましても大きな被害が想定されております。また、首都直下地震の発生も高い確率で予想されております。国民の 1 人 1 人がこのような自然災害を正しく理解し、自らの的確な判断の元に地震防災減災行動をとれるよう学校や地域における防災協議の取り組みを積極的に、推進していく意義や社会の期待が大いにあります。本日の防災教育推進フォーラムは基調講演をお願いしております、林 春男 京都大学教授を座長といたします、防災教育支援に関する懇談会が取りまとめた報告書を受けまして、本年度新たに防災教育推進プログラムとして始まったものであります。この推進プログラムは防災教育の実践者である防災教育の担い手、つなぎ手の活躍を推進すると共に始まっております。ここで全国展開いたします地域の事業を説明させていただきます。本事業では、防災科学技術の研究

成果を活用することにより、防災機関や大学等、それから地域公共団体の防災部局、そして教育委員会、学校等のこれら三者によって、一帯となった連携協力により防災科学技術を活用した教育教材の開発、学校の教職員や地域防災リーダーを対象とした研修カリキュラムの開発、そして実践的な防災教育プログラムの開発を行うことの取り組みとしております。これら3つを作ることに置きまして現在全国で8地域で展開しておりますが、本日のパネリストであります、兵庫県立舞子高等学校の諏訪先生も、神戸・兵庫におきまして財団法人兵庫防災記念21世紀研究機構・兵庫県・神戸市、そして神戸学院大学等のご協力にご活躍されております。これら8地域の事業におきましては平成22年度には完成した教材カリキュラム、プログラム、これらを全国に広く発信され成果の活用が出来るものを確信しております。ここ大阪を始め関西周辺は南海地震に伴い、震度6弱以上になる可能性が高いと評価されています。また大阪港を中心に通る上町断層につきましても将来発生する確率が高く、政府の報告でも想定される被害が甚大だとされております。本日のフォーラムに参加されておる、お1人お1人が自ら防災教育の実践者となり地域や学校、ご家庭・職場で地域の防災力が高まる活動をしていただくことを期待しております。そして今後の防災・減災対策の推進に向けた様々な取り組みに積極的に活用されていく事を強く希望しております。最後になりますが本日の開催にあたりまして多くの関係者の方々のご尽力を頂けましたことに感謝申し上げます。

添田 キャスター

ありがとうございました。続きまして大阪管区气象台技術部長 里田 弘志よりご挨拶をさせていただきます。

大阪管区气象台技術部長 里田 弘志

只今ご紹介いただきました、大阪管区气象台技術部長の里田 弘志でございます。ご来場の皆様、本日はお忙しい中、本フォーラムにお越しいただきまして誠にありがとうございます。主催者の1つであります大阪管区气象台を代表いたしまして一言ご挨拶を申し上げます。皆様今年は東海地方に非常に大きな災害をもたらしました伊勢湾台風から50周年になります。あの台風ではですね、東海地方を中心といたしまして、高潮によりまして一夜にして約5,000名の死者、あるいは行方不明者が出る大変大きな災害になりました。当時のいろいろな出来事をですね、現代の視点から洗い直してその教訓を引き出そうという活動を国の中央防災会議が進めております。その取りまとめ資料によりますと、被害がですねこれほど大きくなった要因の1つといたしまして、自分たちの住んでいらっしゃる、住民の皆さんがですね、自分たちの住んでいらっしゃる地域の危険性を十分に理解して頂いていなかったと。あるいはそのせつかくですね出ました情報が、意味がですね、必ずしも正確に理解されていなかったということがあると言われております。私ども気象庁ではですね、こういった地震や津波、あるいは台風などのいろいろな災害に繋がるような現象に

つきまして、日頃から防災情報を報道機関等のご協力もいただきながら 24 時間体制で作成しております。しかしながらですね、こういった伊勢湾台風の教訓から分りますように、こういった防災情報が皆様の元に届きましてもその意味が充分理解されていなければなかなかそういった情報の効果というのは十分に発揮されないというふうに言われております。このため私どもですね、気象台の発表する情報の意味やあるいはその様々な気象、地震災害に対する理解を深めていただくための防災教育に大変力を入れてるところでございます。そういった取り組みの一環といたしまして各地の気象台ではいろいろ地域の防災訓練に参加させていただいたり、あるいは学校に気象台職員が直接訪問して出前講座を行うといったような活動を行っております。去年はですね近畿、あるいは中国四国地方で 1 年間でそういった催し約 230 回開催させていただきました。また文部科学省の防災教育推進プログラム、こういったものにも参加させていただきました気象台と地域の自治体、あるいは大学の方々と協力して地震や大雨に関する教材作成といったことも取り組んでいるところでございます。本日はですね、南海、東南海地震を中心といたします地震津波現象を題材にいたしまして、防災教育をいかに進めるかについての議論が行われます。また当気象台からも緊急地震速報に関するミニ講座というのを後ほど開かせて頂くという事になっております。本日のフォーラムでのいろんな議論を通じまして防災教育の抱える課題、あるいはそれを更に進めていくための方策といったものが議論され皆様との共通認識となりまして学校やあるいは地域全体のですね防災力が更に高まるということを祈念いたしまして私からのご挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。

添田 キャスター

ありがとうございました。ここで NHK が編集いたしました、大規模災害の記録映像をご覧頂きたいと思います。

映像放送

添田 キャスター

14 年前の阪神・淡路大震災、そして新潟県中越地震など大規模災害は本当に何時起きるか分からないという事をよくお分かりいただけたことと思います。本日のフォーラムでは地域や学校で防災教育を行うことで地震や津波などの自然災害を正しく理解し、自分自身の確な判断で防災行動がとれるよう地域の防災力を高める事を目的としております。防災力ということでは緊急地震速報もその大きな力になるものです。ではここで大阪管区気象台技術部地震情報官 平井 俊一から緊急地震速報についてお話をさせていただきます。

大阪管区気象台技術部 地震情報官 平井 俊一

大阪管区気象台、地震情報官の平井です。今日は緊急地震速報についてという事でお話さ

させていただきます。只今画面でお見せしているのは大阪府を中心にした地図上に、昨年の3月から今年の2月までの12ヶ月間で発生した地震を黒としております。丸の部分が地震でございまして、この中に約2万個を超える地震が発生しております。年間この地域ですとだいたい200~300個の人の感じるような地震が発生しております。そういう中で一昨年の平成19年10月1日から気象庁は一般向けの緊急地震速報を提供しております。緊急地震速報とはどういうものかということの説明させていただきます。簡単に言うと震源に近い観測点で地震波を検知し、直ちに震源位置やマグニチュードを推定し、大きな揺れが迫っていることをお知らせし、それによって様々な対応行動をとっていただくことで地震被害の軽減を図ることを目的とした情報でございます。それではこれがどういう技術で発表していくかということの説明させていただきます。現在全国に気象庁では約180点の地震計、この赤丸で表示しているところがございますから180点の地震計を整備しております。その他防災科学技術研究所では約800個の地震計を整備しております。これらの約1,000個の地震計を用いまして全国で発生する地震を検知しているわけでございます。これがある地震計で捉えた地震波形のモデルでございますけども、最初にここに書いてあるP波というものは、まずやってきます。これは初期微動といいまして非常に小さい揺れの部分でございます。そのあとにここにS波と書いてありますけども、これが主要動といって大きな揺れを伴う波形でございます。この様に時間経過と共に揺れかたが変わってくるということでございます。それでまず最初にやってくるP波、これはS波の速度、伝達速度に比べて倍のスピードを持っておりますので、地震波の大きな揺れの前にやってくるという波でございます。それを地震計でとらえまして、それをすぐさま気象庁に送ってそこで地震波を解析して地震の規模を推定いたします。それによって緊急地震速報を発表するというところでございます。そのP波の後に主要動、大きな波、揺れを伴った波が到着しますのでその前に身の安全を図っていただくという、こういう技術だということでございます。ただし、この技術にも限界がございまして、地震波を検知してから情報が発表するまでに10数秒から数秒の時間しかありません。非常に短い時間でしか対応出来ないということになります。さらに直近で起きますと地震波の、大きな地震波に間に合わない事もございます。緊急地震速報の発表条件でございますけども、地震波が2点以上の地震計で捉えられたとき、それでなおかつ最大震度が5弱以上を推定したという場合に皆様に向けて1回だけ発表いたします。内容としてはこういうもので地震の発生時刻とか起きた場所でございますね、それと強い揺れが予想される地域というものが発表されます。それらをテレビ・ラジオ、防災無線等で、現在携帯電話等で伝達されるわけです。これはNHKさんの映像、放送イメージでございますけども、こういう格好でテレビで見られるということになります。この情報に接した方々は身の安全を確保するための行動をまずとることが重要ということになります。これは昨年6月14日に起きました岩手・宮城内陸地震の例でございまして、一昨年からは気象庁が発表して以来、全部で9回発表しておりますけども、これが一番大きな地震でございました。この地震では、地震が起きました岩手県奥州市とか宮城県栗原市

等では時間的な余裕がありませんでしたが、宮城県の仙台市では揺れの、大きな揺れの到達する 15 秒前に情報が発表されまして、その対応がいろいろ、こういう対応がとられたという事例でございます。それでは近い将来起きるであろうという南海地震の場合でございますけども、仮に震源がここだと、潮岬の南方沖だと推定しますと、緊急地震速報を発表してから大阪府に大きな揺れが到達するまでに約 35 秒の猶予時間がございます。この様に大きな地震に対してより活用できるケースでございます。最後にじゃあ緊急地震速報を見聞きしたときどういう対応をとっていただくかということで状況によってエレベーターの中ですとか、鉄道バスの乗車中といろいろ対応ございますけども、一番重要なことは周囲の状況に応じて慌てずにまず身の安全を確保するということでございます。皆さんこの情報に見聞きした場合はぜひ落ち着いて行動をとっていただきたいと思っております。以上です。

添田 キャスター

ありがとうございました。続きまして、基調講演に移らせていただきます。「大地震に備える！～地域と学校での防災教育～」というテーマで、京都大学防災研究所巨大災害研究センター 林 春男教授よりご講演をいただきます。林教授は日本の巨大災害研究については最先端をいかれる方でいらっしゃいます。それでは林教授よろしくお願いたします。

京都大学防災研究所巨大災害研究センター 教授 林 春男

こんにちは、今ご紹介をいただきました林と申します。今日は大地震に備えるということで学校と地域での防災教育についてお話をさせていただきたいと思っております。実はちょっと事故がありまして、作ってまいりましたスライドの半分ぐらいがどこかへ消えてしまいましたので、30 分というお時間ですから少し端折りながら話せというメッセージだというふうに理解をして、皆さんにお話を見ていただければと思います。まず今日テーマにしようとしております地震はですね、ここにあります東海・東南海・南海地震といわれている地震であります。その規模は東海地震が 8.0、東南海地震が 8.1、南海地震が 8.4 といわれています。もしこれが 3 つ一週に起こると合計したマグニチュードは 8.7 ということになってですね、日本で起こります最大級の地震というふうに言われているわけです。見ていただいて解るように静岡から西の太平洋側に大変大きな揺れとそれから津波が起こるといふ事が危惧されるわけです。この東海・東南海・南海地震というのは世界で一番たくさん記録が残っている地震でして、一番最初は 684 年に記録がございます。以来火山の噴火ですとかいろんなものを合わせて見ていただくとですね、100 年に 1 度ずつこれまできちっと発生をしてきていると。21 世紀も皆さんがいくらお出でだからということで免除はないだろうというふうに考えているわけです。具体的にいつ頃これが来るんだろうかというのを考えてみますと、地震学の皆さんがこういう調査をしてくれました。過去 3 回の、一番最近の 3 回の地震は 1707 年の宝永の地震というのがありました。これは先ほどお話したように

3つの地震が一辺に起こったということで大変大きな規模でした。その時に太平洋側、ここは室戸という四国の場所ですけれども、およそ2m地盤が跳ね上がりました。太平洋側はこの地震の度に地盤が隆起する傾向がありますので2mでした。次の1854年の地震の時にはおよそ1.2mくらい上がりました。これは実は東海地震と南海地震が別々に起きました。今これは皆さんには南海地震を見ていただいておりますが、およそ1.2m跳ね上がりました。そして1946年、昭和21年に昭和の南海地震が起こって、この時もおよそ1.2mほど上がりました。こういうふうに地震の度に地盤が隆起をする、次の地震までは変化がないというふうに考えていただくと、こういう階段状のグラフになります。もっとすごいのはこの階段の下の角が直線にきれいに並ぶという事です。これを使えば次の地震はいつだろうかが解るだろうというのがこの赤い線です、およそ2035年くらいというのが今ここで出てきているものであります。さすがにこれだけでは怪しげだということで皆さん最近今後30年で地震の起こる確率が何%というのはご存知だと思いますけれども、ああいう形で21世紀に入ってから地震の起こりやすさを言うようになりました。これが南海地震の起こりやすさです。最初に発表されたときには40%と言われました。何故かというところの左から3本の棒の面積を足して全体の面積で割っていただくとちょうど40%だったからです。今この一番左の棒はほとんどなくなりました。4番目の棒を今度足し込まなきゃいけません。ということは今、今後30年の確率は50%を超えているわけです。こういうふうに今地震の起こりやすさを表現していますが、むしろ皆さんにはこの絵そのままを見ていただきたいわけです。何時頃この地震起こるんでしょうか。皆さんの目にはやはり2020年から2040年の間が一番起こりやすいというふうに見えるかと思えます。まだだいぶ先かもしれませんが、あるいはうんと近い先だと思われるかもしれませんが、2020年から2040年の間皆さんはどうなってるだろうかというふうにちょっと考えていただくとですね、僕は多分要介護者になるかこの世にいないかだと自分では思っています。この一番起こりやすい時に社会の真ん中にいる人たち、中心となって災害を乗り越えていく人たちはどのくらいの人たちだろうかと考えていただくとおよそ1980年以降に生まれた若者たちだということが分っていただけるかと思えます。それが意味では防災教育というのをほんとに考えなければいけない一番のきっかけだろうと思えます。この地震が起こりますと死者で24,000人。さらに被害額が全部で81兆円、国の国家予算に匹敵するくらいの被害が起きると予想されています。これはですね、政府が何とかしてくれる、あるいは地方自治体が何とかしてくれると、やっぱり考えることは無理だろう、いうふうに考えますと、これをみんなで乗り越えていかなきゃいけない。その主役こそ今の若者たちにならざるをえないというのが現実なんだ。そうであればですね、今の若者たちに、彼らが人生の一番の働き盛りの時にこういう国難といわれるような大きな災害が待ち受けていてそれを乗り越えていく、もちろん自分の財産、自分の大事な人を守るというようなところからこの国全体を、あるいは世界を守らなきゃいけないというような使命を持ってるんだということを理解してもらう必要というのは非常に大きいだろうというふうに思っているわけです。どうして動かないんでしょうか。

じゃあ一体何に私たちは備えていくべきかということについて 5 つほど地震の被害を、ご紹介をしたいと思います。この 5 つの地震被害はこれまでの災害にもありましたが、多分これからも同じようにやはりある災害だと思っていただいてもいいかと思います。ですからこういう被害を出さないようにするという努力を是非していかねばいけないんだと、見ていただけたらと思います。一番最初に見ていただく被害はこれです。強い揺れが起こったら先ほどの東海・東南海・南海地震でも静岡県ですとか愛知県、三重県、和歌山県、徳島県、高知県、そこは直下地震のような大変強い揺れがあります。この地震、この写真は阪神・淡路大震災の時の西宮市で撮らしていただいた写真です。何故この 12 枚を選んだかという、この 12 棟は全部で少なくともお 1 人犠牲者が出ています。こういう形の壊れかたをするようになると命の危険が極めて大きい。阪神・淡路大震災で亡くなった方の 8 割 5 分ぐらいはこういう形の破壊で命を落とされてる。木造の 2 階、1 階部分が支えられなくなってですね、2 階の重みを。それでべちゃんと潰れてしまう。空間がなくなってそこで圧死をされるというような形が大変多ございます。まず、こういう被害を起こさないようにする。もちろん強い家に住んでいただくことが一番ですが、もしかしたら 2 階に寝るのも大変重要な対策なのかもしれません。今日本の地震を見ておりますと震度 6 弱というのを超えますと今のようなですね、家の倒壊が起こったりいたします。そのそれが今後 30 年ぐらいでどのくらいの場所にあるのか、これもしご興味があれば防災科学技術研究所というところのホームページの中にですね、自分で操作が出来るような仕掛けになっておりますけれども、ここの赤いところというのはこれから地震の危険、大変強い揺れを受ける危険が高い地域だということが分かります。こういうこともその是非ご理解をいただけたらと思いますが。同じようなものを今度は 5 弱以上に変えてみるとこんなになります。5 弱というのは何でかといえばそれぞれの地域で地方自治体が災害対策本部をお開きになるような基準の揺れです。こうやって見ていただくとですね、ほとんど全国で地震の危険があるという事が分かっていたかだと思います。2 つ目の被害は何かと言うと、軟弱な地盤での液状化というのがあります。平野部に多いところ。これは新潟地震、1964 年にありましたがその時に世界で初めて着目された現象です。以来どの地震でも発生をしています。右の上は阪神・淡路大震災の時の西宮です。何故液状化と言うかということ、地盤が軟かいというのは土の中に水分がいっぱいあるというわけです。それが揺すられますと土が締まりますので、水が行き場がなくなって比重が軽いために浮き上がってまいります。こんな形になります。そうするとそのクレーターのようなものから水が噴出して来る。あるいは表面が水のようになりますから軽いものが浮き上がったり重いものが沈んだりというような被害がございまして。幸いな事に命はこれで失われる事はありませんが、土の中にあります水道管だとかガス管というのに非常に大きな被害が出ますから、これも阪神の例ですけれども 2 ヶ月 3 ヶ月と断水やガスの機能停止が続く、大変生活に支障が出るような事態もございまして。それから 3 つ目の被害は火災です。これは先ほどの映像にもありましたが阪神・淡路大震災でも大きな火災がありました。たぶんそれ以上に皆さんのご記憶に

あるのは関東大震災の時の火災だと思います。10 万を越す死者が出ましたが、そのほとんど全てが焼死者だといわれてる大変むごい災害でした。横浜は全焼しました。東京も下町が全焼しました。ですから街中が紅蓮の炎に包まれるような光景がありました。でももっと怖いのは阪神・淡路大震災の時の出火の数は、関東大震災の出火の数よりも多かった。やっぱり今の人のほうが昔の人よりも火を粗末にしてる。そんなに注意をしていないということがあります。じゃあ何故今回被害が少なくすんだかといえ、たまたまの幸運です。この時には風がありませんでした。関東大震災の時には台風が接近をしておりましたので、風速 18m という南風の中での地震でした。それが延焼火災を非常に大きくしてるといようなことがありまして、この火災の危険も相変わらず私たちは抱えています。山地にお住まい、あるいは斜面にお住まいの方にもまた別の危険があります。地盤災害といわれてるものです。崖崩れであり土石流であり、あるいは地すべりであるということになるわけですが、これは新潟県中越地震の時の小千谷市の地盤の崩壊の例です。皆川優太君というのが奇跡的に救助されたあの現場です。見ていただくと 20m 高いところに道路が元々ありましたが、その道路の舗装面が川まで落ちこちています。ああいう中に実は自動車が埋まっていたわけですが、これが山の中でいたるところである。先ほどの映像にもあった山古志村の姿です。そして 5 つ目、忘れてはいけない被害が津波です。その怖さはあの 2004 年のスマトラの地震津波で皆さんの目にも焼きついているかと思いますが、ものすごい高い波が襲ってまいります。何度も襲ってまいります。それで多くの方が犠牲になりましたが、そのほとんどが実はこういう水と一緒に漂ってきます漂流物に頭を打ってというようなことが直接のきっかけだと言われておりますので、これも大変心配な事になります。どのくらいの津波がやってくるのかというと、この太平洋側、一帯にかけてです。ね 3m ~ 12m。もし木造の家だったらもろに流されてしまうような津波が太平洋側にずっと襲うという危険がございます。今度の地震では揺れがおそらく 1 分以上続くはず。早いところでは 2 ~ 3 分でもう津波がやってきます。先ほどあった串本なんてものはまさしく 2 ~ 3 分です。太平洋側のほとんどの地域に 1 時間を経ずに津波はやってきます。その時に私たちに今防災能力として出来ることは津波の警報発令するぐらいです。実際の救助は間に合わないということを考えていただくとお 1 人お 1 人の自覚、あるいはお 1 人お 1 人の理解というものが命を救うためにどれほど必要かということもお分かりいただけだと思います。もう 1 つ忘れてはならないのは、この日本を襲う津波は太平洋を渡って反対側にも被害をもたらします。1960 年にチリ地震津波というので日本の太平洋側大変大きな被害が出ました。これはチリで起こったマグニチュード 9.1 の地震が、引き起こした津波が 1 日かけて日本を襲ったものです。同じことが今度は 1 日かけて太平洋を逆に渡って中南米、あるいは北米にも被害をもたらすと。それからもちろん南太平洋の島々にも被害をもたらすことで、被害は日本だけでなくです、世界に及ぶ危険性もあるんだということがあります。でもそうはいっても 24,000 人の犠牲者があると言っても国民の 99.5% は生き残るわけですから、その後皆さんがどうやって立ち直っていくのか、これも大変重要な大きな

課題になるんだと思っていただけたらと思います。今みたいなことをご紹介した上で地域の防災力というのを高める事が今日の目的になっていますから、地域の防災力の構造みたいなものを少しご紹介をしたいと思います。それはここに書いてあるような絵で表現できるかと思いますが、100%と書いてあるのは普段の私たちの生活だと思ってます。その普段のように暮らしていることが出来なくなる、被害が発生するということでそれが落ちます。落ちたまんまではたまりませんから、一生懸命みんなで努力をしてそれを元のように戻す。こういうそのぼこっと凹んで元に戻るといふ三角形が出来上がるわけです。この三角形が多ければ地震の影響が極めて大きいと思っていただいてもいい。言い換えれば防災力が低いというふうになるだろうと考えていただいてもいいかと思いますが。じゃあ皆さんの今の敵を知るという意味での東海・東南海・南海地震についての知識や、あるいはこういう被害が出るという知識をどうやって活かすかとすれば、1つは被害が出ないようにするという被害抑止力を高める努力にこれから向けていくべきだといふふうになるかと思いますが。それからもう1つは被害が出てしょうがない部分も実はございます。そうすれば一刻も早く復旧出来る様な力を、あるいは備えを高めようといふことも必要なかと思いますが。出来ればこういう努力をバラバラにしないで総合的に組み合わせる事で面積は極めて小さく出来るわけです。こういったその様々な方法を自分たちの目的に合わせて組み上がられるような力というのが実は防災能力、あるいは防災力だといふふうを考えていただくと、是非これから防災教育というものを通して高めていくべきものはこういうものではないかと思います。今日実はここに参りまして皆さんとちょっと事前にお話をしている中で、やはりその「体験の風化」の問題がございまして。先ほど14年前の阪神・淡路大震災の映像を見ていただきましたけれども、多くの方があれが風化するといふふうにおっしゃる方もおられます。ですけど私は被災した方ご自身の中であの体験が忘れられる事はないと思っています。ですけど社会全体から見ると体験をした方自体がどんどんどんどん減っているんだというのがこの絵です。これ20年分をここに書かしていただきましたが、1995年に30歳だった方は2015年になるともう60歳を超えます。どんどんその後、生まれた方たちが大きくなります。組織もどんどん人が入れ変わっていきます。こういう事がその実は風化、と言われてきていることの実態なんではないか。体験した人にとってはいつまでも忘れられないものなんですけど、体験をしていない人たちがたくさん増えてくる、その中でなかなか上手く語り継いでいけない。そこが風化の根本原因のように思います。そういうものを打ち破っていくといふことも実は防災教育の大変大きな使命です。残り後7~8分ですが、少し先ほどご紹介がありました防災教育支援の懇談会での議論の中身をご紹介させていただいて防災教育についての整理としたいと思います。ここでは地引を見ていただいたときの教育といふものの定義があります。他の人に対して意図的な働きかけをしてその人を望ましい方向に変化させることが教育だと書いてあります。広い意味で言えば人間形成に関わる全てを含むといひます。家庭ですとか学校ですとか社会という場でなされるといふふうな定義がございました。これを防災教育といふものに当てはめてみるとどうだろうか。他人

に対してというのは教育対象なんです、この場合、自分ではない誰か別の人に教えるのではなくて、やはり教わる対象も自分たちなんだとお考えいただけたらと。何故か、命の危険に晒されるのは私たちです、生き残った後それを乗り越えていくのも私たちだとすれば学ぶべきは私たち自身なんだというふうにお考えいただけたらと。それから意図的な働きかけを行う人たち、これを教育主体と考えていいと思いますが、これもやはり誰か他が教えてくれるのではなくて、自分たちでやらなきゃいけないことだろうと思います。どういう方向に変化させるかといえば、先ほどお話したような防災力を高める方向に変化させなければいけない。人間形成に関わる全ての精神的影響ということで言えば、ある意味では人生っていうのは危機の連続でございますから自然災害だけじゃなくて、あるいはこの東海・東南海・南海地震だけじゃなくてですね、いろいろな危機に対してそれに立ち向かっていけるだけの力を家庭や学校や社会、あるいは地域といったらいいかも知れませんが、それで作るべきではないかというふうに思いました。改めて定義をしてみると私たち自身で自然災害に対する、防災力を高めるための試みを防災教育と呼ぼうじゃないか。決して避難訓練をするだけが防災教育でないというふうに申し上げたいと思います。自分を守ることが出来ない方も残念ながらおられます。そういう方たちを支援する力も是非併せて持ちたいというふうに思いますし、それがひいては人生の危機に立ち向かっていく原動力になってもらいたいというふうに防災教育を捉えたいと思います。こういうふうに議論進めてまいりましたら実は大変よく似た定義がすでになされていた事に気がつきました。それは1996年になされました、文部省の中央教育審議会。いわゆる中教審というのの答申の中にありました。「生きる力を育む」というのがありました。ここには私たちはこれからの子供たちに必要となるのはいかに社会が変化しようとして自分で課題を見つけ自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動しよりよく問題を解決する資質や能力であり、また自らを律しつつ他人とも協調し、他人を思いやる心や感動する心など豊かな人間性であると考えたという件です。さらにたくましく生きるための健康や体力が不可欠だという事まで書き添えてありました。まさしく私たちはこういう力を育むことが実際には防災力を高めることになるんだろうと思っています。具体的にそれをどうしたらいいのかという時に大変重要だと私どもは思いましたのは、コンピテンスというこれ横文字で恐縮ですけども、概念としてつまりという意味で言うと何とかが出来ようになる。何が出来ようになればいいんだ、自分の命を守るために、あるいは財産を守るために毎日の活動を守るために何が出来ればいいのかということを知識や技能や態度としてきちっと身に着けていく。それをちゃんと言葉を通して人に説明できる、そういうことを教材として整備をしていく必要があるんだろうと思っています。さらに方法を考えていただくと内発的動機付けという言葉方をいたしますが、自分から積極的に学んでいく、能動的な学習というのを展開する必要があるんだろうと思っています。この防災教育支援の枠組みの中では生きる力を充実させたい。そのためには自ら問うて調べてまとめて他の人にそれを発表する、そういう力を伸ばしたい。それを支えるような問う技術、調べる技術、まとめる技術、発表する技術と

というのがありますからそういうものを防災の教育のコンテンツの整備を通して高めていけるようになればというのが考え方でした。もう少しそれを言葉に整理していえば科学的技術的マインドというものを持って防災に取り組んでくれる人を是非作りたい。この科学的技術的マインドってというのは何か、合理的論理的に考えられる証拠を大切に出来る意味のある問いを立てることが出来る、そして問題解決能力を高めようという気持ちを持っている。こういう人たちを1人でも多くしたいというふうにまとめさせていただきました。その結果が本年度から5年間の予定で進んでいるいろいろな試みであります。その中では学校、家庭、地域、職場ということの中で子供も大人も学ぶべきだと考えました。その時に昔の受験勉強のような詰め込み講義主体の受身的な学びでは駄目なんだろうと。もっと自分から積極的に関わっていく能動的な学習でないといけないだろう、というふうに思いました。学習というのはどんな場合もやはり密接な人のつながりの中で成立するといわれますからそのつながりをいろんなレベルで作っていかなくちゃいけない。知ってる人がこれから知ろうとする人に伝えるのを担い手と呼ぼうじゃないかと。だけど1人で全部担うのは辛いですから、それをお互いにつなぎ合わせてあげているいろいろな資源を融通し合えるようなそういう横の連携を作る人をつなぎ手というふうに呼んで、このつなぎ手と担い手が組み合わせる事で大きな力になってですね、何も学校の先生だけが苦勞される、地域の防災のリーダーだけが苦勞されるというのではなくて、皆さんたちには担い手のお役をさせていただきますがつなぎ手と連携を保ったり、あるいはいろんな形で自らの研鑽をしていただくような、そういったたくさんの人たちで大人と子供がレベルアップ出来るようになっていくことを是非目指したいというのがこの中間の取りまとめの骨子だったというふうに少なくとも座長としては理解をしております。これから向かう日本は人口減であり高齢化が進んでいきます。今1億3,000万ある人口が1億人になったところで先ほど申し上げたような東海・東南海・南海地震が起こるといふふうに言われています。ですから一層に厳しい状況です。だからこそなんですが、次代を担う若い人たちの生きる力を是非高める、その一助というか第1歩というものを防災教育として考えていければ、いふふうに思っている次第であります。短い時間でちゃんとお話出来たかどうか分かりませんが、大変ご清聴いただきましてありがとうございました。

添田 キャスター

ありがとうございました。私たち1人1人が自分たちの生活、命、財産を守るために何をすべきなのか、1人1人が積極的に能動的に考えるということが大切というお話でございました。また連携も、周囲との連携も大切というお話であったと思います。ではここで15分間の休憩とさせていただきます。休憩の間に係の者が質問書を回収させていただきます。また、受付にも回収ボックスがございますので、そちらにもお入れいただきますよう、よろしく願いいたします。この後のパネルディスカッションですが、14時40分からと予定させていただきます。14時40分までにご着席いただきますよう、よろしく願いいたします。

す。

休憩

添田 キャスター

皆様お待たせいたしました。只今より、パネルディスカッションを始めさせていただきます。パネリストの皆様を50音順にご紹介させていただきます。摂南大学外国語学部准教授 浅野 英一様。浅野先生は摂南大学で防災チャレンジプラン、摂南大学ボランティア・スタッフズを率いていらっしゃいます。兵庫県立舞子高等学校 環境防災科教諭 諏訪 清二様。舞子高等学校で環境防災教育に力を入れていらっしゃいます。そして先ほど基調講演をいただきました、京都大学防災研究所巨大災害研究センター 教授 林 春男様。行政面から防災教育推進に取り組んでいらっしゃる、文部科学省研究開発局 地震・防災研究課 防災教育担当課長補佐の滝 明様。地域の防災危機管理に携わっておられます大阪府総務部危機管理室 消防防災課長 森井 美満様。そしてここからの進行はNHK大阪放送局の住田 功一アナウンサーにバトンタッチいたします。よろしくお願いいたします。

NHK大阪放送局 チーフアナウンサー 住田 功一

よろしくお願いいたします。今ちょっと打ち合わせをしておりました、いきなり本番が始まりましたですね、慌ててコンタクトレンズを入れてきたんですが、こんなに慌ててコンタクトを入れて仕事に望むのは震災の日の朝以来でありまして、ちょっとバクバクしております。皆さんからですね、なるべく限られた時間ですので、具体的な事例で今日お越しの皆さんが、これはちょっと家帰ってやってみよう、うちの学校やうちの地域でやってみようという課題をなるべくたくさん伺いたい、このように思います。防災教育その実践を阻む壁は何なのか、というところを中心に考えながらどうすれば地域や学校での防災教育が広がって多くの実を結ぶのか、そしていざという時役に立つのか、そのヒントを伺っていきたいと思います。まず自己紹介を兼ねまして日頃どういうその活動をなさってらっしゃるのか、お仕事をなさってらっしゃるのか伺っていきたいと思います。まず摂南大学の浅野さんからではお願いいたします。

摂南大学外国語学部 准教授 浅野 英一

摂南大学から来ました浅野と申します。普段は大学の中でボランティア論とか国際協力論というものを教えていますけども、クラブ活動として「ボランティア・スタッフズ」というそういったクラブを作って、そして地域での協力活動をいろいろやっているんですけども、その中で災害時に活動できる青少年ボランティア育成というような、そういった地域で貢献する学生と共に地域の人たちに貢献できるようなというような、そういった活動をしています。その中で大きなポイントとしては命の大切さっていうのを身につけながら、被

害経験のない町、寝屋川の中ですね、被害、被災経験のない学生が、被災経験のない住民とそれから被災経験のない協力機関にどう防災教育を根付かせていくかというところでたくさんの失敗談を持っていますので、それをちょっとご紹介していこうかなと思ってます。

住田 コーディネーター

なるほど、「ボランティア・スタッフズ」というのはいってみればいろんな学校で呼び名が違うでしょうけれども、いわゆる公認の課外活動団体と。

浅野 准教授

そうです。公認のクラブです。

住田 コーディネーター

なるほど。青少年ボランティアリーダー、つまり学生の皆さんが、更に中学生・高校生などの青少年に更に伝えていこうということなんですね。

浅野 准教授

そう。その中の中高生の中のリーダーを作ってそのリーダーがまた自分たちの学校に帰って防災教育のような活動に、が出来るようになってほしいなということで、リーダーを作っています。

住田 コーディネーター

なるほどね。人材を作るという事は学校の中では限られたね、年月3・4年というね、年月ですからご苦労もおありかと思います。そのへんはまた追って伺っていきたいと思います。続きまして、舞子高校の諏訪さんお願いします。

兵庫県立舞子高等学校 環境防災科 教諭 諏訪 英一

皆さんこんにちは。兵庫県の神戸市にあります県立舞子高校の、実は環境防災科という防災教育を専門に行う、日本で唯一の学科があるんですが、その科長をしております。神戸で震災を、防災を専門に学ぶ学科というと、どうも震災で辛い体験をしたに違いないとかですね、そういうふうに思われるかも知れないんですが、私自身はあんまり辛い体験はしていないというのが正直なところなんです。95年に震災がありまして、学科ができたのは2002年ですから7年間、兵庫県で小中学校を中心に震災を語り継ぐための防災教育をしてまして、その1つの高校版として作られたのが環境防災科です。ただ高校の先生で防災やってるから地学とちゃうかとよく言われるんですけど、英語の教師です。ですから震災で辛い体験せずに英語の教師でも防災教育をやっていると。つまり防災教育の敷居を

低くするのが私の仕事かなと思ってます。日々、神戸では震災に関わるいろんなイベントとかセミナーがありますし、個人的にはこの仕事面白いと思ってますので土日返上、夜も返上してあちこちで勉強さしてもらって、勉強したものをそのまま生徒たちにつないでいきたいというふうに今活動をしております。

住田 コーディネーター

楽しみながらやっていたらというお話を聞いておそらく多くの先生方は専門じゃないのにどうこれ伝えたらいいの、て悩んでらっしゃる方もいると思います。そのへんまたじゃあちょっと後でいろいろ教えてください。

諏訪 教諭

はい、お願いします。

住田 コーディネーター

お願いします。大阪府の森井さん、お願いいたします。

森井 美満 大阪府総務部危機管理室 消防防災 課長

大阪府の危機管理室 消防防災 課長の森井でございます。大阪府の危機管理室は 3 つの課がございまして、1 つは自然災害以外の様々な危機異常、最近ですと鳥インフルエンザとかあるいは新型インフルエンザを対応する危機管理課。そして私の消防防災課、主として災害、自然災害を担当をさせていただいております。もう 1 つは保安対策課といまして火薬とか電気とか高圧ガスの保安関係、あるいはコンビナート災害等を担当しております。そのうちの消防防災課の中にですね、訓練啓発グループというのございまして、そちらのほうで防災関係機関の方々と連携した防災訓練でありますとか、あるいは府民の皆様方への防災啓発、これをやらせていただいております。地域住民の方々への啓発という意味では、例えばうちの職員が各市町村で実施をされます、行事やイベント等に出かけて行きまして、そこに啓発コーナーをいただいて啓発をさせていただくというような形で、府民、地域住民の方々に対する啓発という意味ではいろいろと取り組みをさせていただいてるというふうに認識をいたしております。ただ本日のテーマであります学校現場での防災教育ということになりますと。

住田 コーディネーター

前半のね、テーマなんですけどね。

森井 課長

教育委員会と我々防災部局は連携はさせていただいておりますけれども、今のところ直接

例えばうちの職員が学校現場へ行かしていただいているとお話をさせていただくとか、そういうところまで現時点では取り組みは進んでおりませんので、今後ですねそういうことにも積極的に取り組んでいきたい、いうふうに考えております。今日は私も一緒にですね勉強させていただくつもりで参加をさせていただきたいと思っておりますので、よろしくお願いをいたします。

住田 コーディネーター

よろしくお願いします。続きまして文部科学省、滝さんお願いします。

滝 明 課長補佐

文部科学省から参りました滝です。よろしくお願いいたします。私ども文部科学省の地震・防災研究課では主に2つのことを行っております。1つは実は地震の研究です。それからもう1つは防災科学技術ということで地震の研究からさらに防災に進む過程、それから火山とか風水害、雪氷とか土砂災害とかそういった幅広いことを行っています。例えばお手元の封筒の中にこちらのリーフレットが入っていたと思うんですが、こちらは、実は阪神・淡路大震災の契機にいたしまして政府で地震調査研究推進本部というものが出来ております。これは地震が何処で起きるのかということ、当時は大学とか研究機関、一部の行政で分かっていた事ですが、それが十分に全国的に知らしめられなかったという反省がございます。それを元にしまして、調査研究の成果を一元的に発表したり推進したりという、そういった組織ということで発足しています。そして例えばこういった地震動予測地図というものを作ったりとかしております。これが地震の世界の話で、あと防災科学技術につきましても、先ほど申しました、各種災害に対しての研究を進めております。それらの研究成果を分かりやすく伝えるために1人1人お手元に渡していく、そのために防災教育ということを着眼しております。この防災教育というのは地域学校、ご家庭、職場、いろんなところで出来ると思っておりますが、その為にも分かりやすくするためにもこういったもので、コンピューターで、分かりやすく映像化していくとかですね、見えない地面の下はどうなってるかとか、そういったことがより分かるようにお伝え出来ればと思っております。よろしくお願いいたします。

住田 功一 コーディネーター

よろしくお願いします。あのチャレンジ・プランというのもあるんですね。それちょっと一言教えていただけますか。

滝 課長補佐

えっとですね、オーバーなちょっと言い方であれなんですけど、チャレンジ・プランは政府の内閣府防災担当等が進めております、私どもは関与しておりますが、防災教育の1つ

のコンテストとか育成のプランになっております。

住田 功一 コーディネーター

ホームページもありますね。

滝 課長補佐

そうです。それから、それ以外にもですね、例えば兵庫県とそれから防災、それから毎日新聞社さんでやられてる防災甲子園。それから損保協会さんがやられてるマップコンクールとか、それから内閣府が担当しているところで防災の日のポスター等ですね、そういうものとか、各種防災教育を取り巻く評価したりとか表彰したりという制度はいくつかございます。実はこれは防災の日は別にいたしまして、ここ5年ぐらいにこの3つ、そのチャレンジ・プラン、それから防災甲子園、それからマップコンクールというのを発足してまして、これが1つの運命的な何かを感じるようなところがございまして、というのは始まった時期はちょうど同じなんですね、阪神から契機の5年経ってからとかそういった流れの中で始っておりますので、それから考えますとこれからもっともっと推し進めていかなければいけない。やはりみんながやっているという事を広く知っていただく1つの機会になるのではないかと期待しております。

住田 コーディネーター

マップコンクールも、それから防災甲子園も防災教育のチャレンジ・プランも実はホームページのいろんな取り組みをした学校が優秀な学校が並んでましてですね、その年々に様々な取り組み、こんな取り組みがあるんだなという取り組みも出てますのでそちらもまた皆さんご覧いただければと思います。では京都大学林さんお願いいたします。

林 教授

何か言わなきゃいけないんですけど、僕は元々学校で勉強したのは社会心理学というのが専門で、それとはあまり関係ないような事をここ25年ほどやっていて、災害が起きた後の社会の対応というのをどうすれば効果的なもの出来るかという研究をしていると。それからそういう分野の新しい研究者や実務化を作ろうというのが当面の仕事です。

住田 コーディネーター

ありがとうございます。社会心理というふうにおっしゃいましたけれども、私たち放送局が伝えてもなかなか避難行動に皆さん移されなかったり、いつも情報は入ってくるけどどう動くのかとか、あるいはやらなきゃいけないことは分かってるんだけど、その防災教育進まないんだとかいろんなところの実はその根底にはみんなの心理というものも絡んでくると思いますけどどうしたらそこを突き動かす事が出来るか。いい方向に動かせられるかと

いうヒントも是非いただければなというふうに思います。まず前半のお話はですね、学校教育の現場での防災教育。それをうまくやっていくにはどうしたらいいのか、それを阻むものはいったい何でどう乗り越えたらいいのかということなんですが、林さんその防災教育というものは大きなその歴史的な流れっていうのは日本ではどういう流れだったんでしょうこれまで。

林 教授

どちらかと言えば軽視されてきたのかもしれませんが。かつて戦争が終わった直後はですね、防災教育というのは必須科目であることもありましたけれども、それが戦後すぐの時期で、その後はやはり教科教育中心にものが進んでいますから、だんだんに、特に学校の中ではですね、防災教育というのは特別な課外授業だとか、あるいは防災訓練を通して学ぶものというような認識が定着していたのかもしれませんが。実際に文部科学省では大局が防災教育を主管して下さっていて、学校の安全に関わる教育の一環としてやられています。ですから防災も重要なテーマですけど、それ以上にもっとやっぱり切迫しているものとして防犯の教育があったり、あるいは最近ですと食の安全の教育があったりしてですね、いってみればその狭い時間の中を奪い合うというような形になってます。先ほどのお話もしましたが、中教審が生きる力というものを伸ばそうとってくれたことの結果として総合の時間というのが生まれましたけれども。今のこの中でですね、やっぱりでもパーセンテージでいうと非常に少ないパーセンテージですけども、防災というようなものに取り組もうと。基本的にはやはり痛い思いをした地域ほど、あるいはこれからそういうものが現実視されているところ、そういう意味でいうと兵庫県ですとか、あるいは三重県、和歌山県、高知県といったようなですね、南海地震の危険性を非常にはっきりと認識しているようなところが今中心になって、どちらかという西高東低で防災教育をやっていると、その全体のトレンドとしてはそういう特別な授業とか課外の事だけで防災を教えるんじゃないかと通常教科の中にねその防災の要素というのを出来るだけ取り込めないだろうかというようなご協力をしてくださる先生方が少しずつですけど、増えてきていると、そんな状況だと思います。

住田 コーディネーター

今ちょっと気になったのはその通常の教科の中で取り組みをしてると一言で言えばどういう事をなさってる所あるんですか。

林 教授

例えば英語の科目の中で、英文で災害についての物を読むとか。あるいは音楽の中に神戸が作った「幸せはこぼろ」というような歌をうたってその思いをはせてみるとかですね。それから図工の時間、なんかちょっと小学校みたいですけど、図工の時間の中で自分たち

でジオラマを作ってみるとか。

住田 コーディネーター

住んでる地域のジオラマを作ってここが危ないとか？

林 教授

そうそう、そうですね、ここが危ないとかというようなことをやってみるといようないろんな工夫をして下さってます。

住田 コーディネーター

なるほどね。文部科学省の滝さん、そのチャレンジ・プランなどでですね、応募されてくる学校というのはたくさんあると思うんですけども、その中の傾向、それから課題ですね、そういったのはどういったところがありますか。

滝 課長補佐

チャレンジ・プランを含めて全般的な話をさせていただければですね。私どもの特にこれからは期待した意味で関心を示しておりますのは、やはり学校の中でいえばですね。学校だけが取り組むんでなく、地域と共に取り組んでいるかどうかということも1つ関心がございまして。そして学校自身、その学校が取り組むということは何が重要かということ、やはり児童生徒だったり、学生さんだったり、大学生さんだったりですね。そういった方々が何故これをやらなきゃいけないかということ気付いていただいて、そして自ら実践していこうと意欲を持って取り組まれると、そういった事がそれが将来つながっていくのではないかなと。パネリストで参加されています、諏訪先生とか浅野先生、それぞれのことでも、例えば諏訪先生の高校でございまして、高校生が卒業してから大学生になられて、やはりボランティアなりとかサークルなりとか活動でこの防災教育、あるいはそれに近い活動をされてご活躍をされる。つまりそれが経験として活かされて自らやってみようという実践されるわけですね。また浅野先生の摂南大学さんでもボランティア・スタッフズの方々は、やはり自分たちでやろうとする、実践されていくという。ですからやはり高校生・大学生になれば自ら実践の1つとしてやってみようということが出来るわけです。そういったことを通しながら人間形成されていくということがございまして。ですからそういうのを見ていると、やはりつなげていくための何かって言うんですか、広げていくというその意欲をもって広げていくという姿勢というのが非常に注目されますし、私も逆に大人のほうが考えさせられると。私も大人、すぐ壁に当たると悩んでしまったりあえず流してしまえというような、低い方向へ流れてしまう傾向がございますので、ただその点については若い方々はですね、やはりぶつかって何とかしてみよう、まだまだやれるんじゃないかということで、非常に前向きだと思うんです。

住田 コーディネーター

なるほど、滝さんが最近いろんなその応募をとかですね、取り組みをご覧になっていて、これ新しい傾向だなとか、これはぶつかりを乗り越えたなというのは何かありましたか、具体的には。校名までは言わなくても結構ですけども、こんな事例だったというのはちょっと皆さんメモ取れるような感じで。

滝 課長補佐

そうですね、ちょっと先日聞いた時の話ですと例えばその地元の市役所とですね、連携を取らなきゃいけない時にいろいろ市役所の担当の方にお話をしたという、でもなかなか実際は動いていただけなかったとあると。ただやはり繰り返し繰り返しですね、ぶつかっていく事によって非常に理解して示していただいたということから考えると、大人は簡単には動かないと。ただ動かないけれども熱い熱意を持って向かってくる方にはいつかは心が動かされる事があるという、そういったのを聞きますと、何か昔聞いたような話ですけど非常にいい話だなと。やはり私もそうならなきゃいけないのかも知れないですけど、なかなかそういうふうに動いてないところありますので。

住田 コーディネーター

それは中学ですか、高校ですか。

滝 課長補佐

それは大学生なんです。

住田 コーディネーター

大学生。

滝 課長補佐

はい。

住田 コーディネーター

役場のどういうところに、どう働きかけるテーマなんですか。

滝 課長補佐

活動として、自分たちの活動と一緒に何かをしたいという事なんですけども、それが上手く市役所の担当者の方には伝わってないところもあると思うんです。

住田 コーディネーター

それはボランティアですか、それとも何か。

滝 課長補佐

ボランティアということで。

住田 コーディネーター

ボランティア活動したいということが伝わらなかったと。何度もチャレンジして、戸を叩いていくとやっと向こうも理解してもらえたということですか。

滝 課長補佐

はい、ですからそれは確かに文化に違いが1つあると思うんですね。児童生徒とか学生さんはやはりどちらかという、まだ社会ということについてよく深く認識されてないところもありますから、話をしていけば分かってくれるのかなと思うんですけど。一方行政というのは非常に固いところが、手堅いとくればきれいですけども、実際は腰が重いと。そういうふうな初めてのものとかこれからやろうとするものについては非常に慎重になります。ですのでそれを、話し合いをする、続ける事によって両方の到達点になるとかですね、いいところ見出していただいて進めていくところは非常にいい事だと思いますので。ですのでそういったぶつかって砕けるじゃないですけど、そう言いながら進めていくところに新しいところは見出せるんじゃないかと、そういうことに期待しています。

住田 コーディネーター

分かりました。諏訪さんさっきからうなずいてらっしゃいますが、諏訪さんのところなんかはこの防災、環境防災科、防災に関心を持ってる生徒さんばかりが来てもうご苦労もないんじゃないかと思うんですが、何かありますか。

諏訪 教諭

いやいやそんなことないです、普通の高校生が普通に来てますので。ですから高校生たちに防災の面白さを発見してもらう時に私が心がけているのは、高校生って好きな事とか、将来の夢とか得意技とかいろいろあると思うんですけども、それと防災がどっかでつながっているという事を具体的に見せてあげる事にしております。ですから国際的な勉強がしたいとか英語が好きだとかいう生徒にですね、途上国の防災事情を英語で授業してみると、その卒業生たちが集まって途上国で防災教育を行うような団体を作ってチャレンジ・プランにチャレンジさせてもらうとか。あるいは幼稚園の先生になりたいんだけどという子供たちに、高校生に今の幼稚園ってまだまだ安心安全守られてないねってことを見せる事でじゃあ自分たちは幼稚園で防災教育をしようというふうなんです、やっぱりその好き

な分野と防災をつなげてくれるんですね。それが建築であったりスポーツであったり。面白い子はね、私の将来の夢は歌手と語り部になることだといって、大学生になったんですけど辞めて、歌手でインディーズでデビューして、ついでに防災語ってる言うてましたけど。そういうふうにその。

住田 コーディネーター
実現系ですね、それはね。

諏訪 教諭

好きな事と防災をつないであげると若者は非常に興味を持ってくれるなというのがこの7年間やってきた私の感想です。

住田 コーディネーター

なるほど、つまり自分の好きな事は必ずどっかでこの防災、あるいはみんなで生き抜くこと、力を合わせて生き抜くことと共通してるんだと、そういう事を知ってもらうんですね。

諏訪 教諭

そうですね。それを体験するような場をどれだけたくさん用意できるかというのが教育する側に求められてる事だと思います。

住田 コーディネーター

なるほどね。最近ですね、その私などはね、最初防災教育というのは阪神大震災前に遡って考えますと、いわゆるその消火器を持っていった的に当てるとかですね、そして消すんだとかですね。あるいはバケツリレーをするんだとかですね、そういった非常にプリミティブな昔から語られてきた事を堅実にやっていけばよしというふうに思っていたんですが。最近はその体験してみようとかですね、あるいはその町の人と一緒にしてみようとかですね、例えば避難所体験なんていうところも多いです。あと修学旅行と一緒にしてみようとかですね、いろんなその試みが枝分かれしてきていて、おそらく先生方もメニューはかなりあるなというふうに思ってるんじゃないかなと思うんですが。諏訪先生、だいたい累計としてどういうその防災教育にはメニューが今ありますか。

諏訪 教諭

そうですね、防災を考える時に元々はおっしゃるようにその避難訓練やってりゃいいと、もうちょっと頑張れば防災訓練でいいじゃないかと。でもそれで全く手も足も出ない。表現悪いんですけど、役に立たなかったのが阪神・淡路で分かってですね、それからいろいろ考え出したんですけど、やっぱりまずきちんと自然を知る事。我々が住んでる地球とい

うのはどんなふうに動いてるんだっていうことを知る事。そのための勉強をやっぱり一生懸命やっていてそこで地学を学んだ若者が地域に出て行って地震のメカニズムを教えたというような活動をしてる面白い取り組みが1つありますね。

住田 コーディネーター

まずその大地、地球というメカニズムを知るといふ。

諏訪 教諭

そうですね。それからもう1つはそれを知った上でじゃあ地震がきたらどう対応したらいいのかということで災害対応を過去の教訓から学んで、地震がくれば隠れるレベルからですね、じゃあ隠れなくてもいいように強い家に住もうとか。あるいはもっと地域のつながりを作って地域同士助け合おうということを勉強するほうも生まれてきてますね。

住田 コーディネーター

人間対応型。

諏訪 教諭

そうですね。それからもう1つはもう少し離れて社会全体が豊かで強くなれば防災にもつながるんじゃないかと。被害は少し出るけれどもお互いが豊かにつながり、つながり合っていて、信頼しあっててなおかつ社会に極度の貧困もなく、そういう地域だと本当にお互い助け合えるんじゃないかと。災害時の要援護者についても災害のためにだけにリストを作るんじゃなくて、日常的に福祉の課題で地域が頑張れば大丈夫じゃないかという事で、防災と表に出さずに福祉で高校生が地域で頑張れば大丈夫じゃないかという事で、地域づくりで高校生が地域のお祭りをしたりしながら地域の人と一緒にやって、それで地域と高校生がつながっていくみたいなですね、そういうパターンが最近増えてきてますね。ですから。

住田 コーディネーター

地域社会の力、形作り系ですね。

諏訪 教諭

そうですね、避難訓練だけでなく。それからもう1つは防災教育というのは教える側がいて、教えられる側がいて。偉い先生がいて高校生が学ぶというパターンをみんな考えるんですけど、そうじゃなくて中学生や高校生が小学生に教える教材を作るとか、防災のゲームを作る、すごろくを作る、カレンダーを作るといったふうに防災の何かこの成果物を作る過程で学んでいくような、そういったそのアクティブな防災教育というのも全国で

広がっているような気がします。

住田 コーディネーター

それは具体的なものはどういうものがありますか。

諏訪 教諭

例えばですね、徳島県の南のほうに美波町っていう、美しい波の町ってあるんですけども、その中学生たちは地域の人たちといろいろ話しながら昭和南海地震の津波の話も聞きながらですね、自分たちでカレンダーを作っていくわけですね。

住田 コーディネーター

カレンダー。

諏訪 教諭

防災カレンダー。そのカレンダー毎日家の中で地域の方が見ると地震がきたらどうしたらいいとかですね、どこに逃げたらいいとかいろいろ書いてあるわけですよ。毎日見るカレンダーですから。子供たちはそのカレンダーを作る過程で過去の、昭和の南海の大津波の学習もし、そして地域の人を先生にして自分たちはそれを教えてもらって、というような形でですね勉強していくと、そういうパターンがありますね。

住田 コーディネーター

なるほど、それをまた自分より歳若い子たちに教えて伝えていくというつながりですね。

諏訪 教諭

そうですね、次のステップはそこに来ると思うんですね。

住田 コーディネーター

そうですね。今伺いましたらその自然を知るということを土台にしよう、あるいはどう対応するかという事を考えよう。それから社会のそのパワーを高める事がとりもおさず命や災害に立ち向かうことなのであるという社会を強くする系ですね。それからあと、中高生が下の学年に伝えるという、人に伝えながら自分も学んで学びが染み込んでいくというですかね、そういった形であるということ。そして社会とのつながりというのも今出てきましたけれども、そういった意味では摂南大学の浅野さんはまさにその社会とのつながりですが、ちょっとそのさっきのボランティアの仕組みからもう1度ちょっと詳しく教えていただけますか。

浅野 准教授

スライドは用意出来ますかね。

住田 コーディネーター

ここでちょっと見られますかね。浅野先生のパワーポイントが出ましたら、出ましたね。

浅野 准教授

えっとですね、今ここにタイトル出てるんですけども、災害時に活動出来る青少年ボランティアリーダー育成セミナー。摂南大学の「ボランティア・スタッフズ」という学生がやってるんですけども、このボランティア・スタッフズのほとんどの学生が実は教職課程を取ってる学生なんですね。この教職課程の学生がですね地域の小学校、中学校にボランティアに出た時に何を感じたかという。情操教育を行われてないというそういう発想だったんですね。情操教育って一体なんだ、総合教育、総合的な学習とかっていつてるんですけども。その中で命の大切さをあまり育んでないんじゃないかって何か軽く言っちゃってるような感じをしたと。ある学生がその子供を見ていた時に虫をですね鉛筆でぐっさりと刺してしまったというところあったんですね。それ見て子供っていうのは非常に簡単に命を殺してしまうんだなと。その学生がその子供に「そんな事したらあかんねん」って言ったら「いやゲームでは命リセットできんねん」とか言ってね。

住田 コーディネーター

リセットね。

浅野 准教授

そういうところがあってですね、何とかこう命の大切さを伝えようというような形で災害時に活動できる青少年ボランティア育成セミナーというのをこう3年ぐらい前から開催させていただいたんですね。すみません、次のスライドお願いします。この中にですね、被災経験のない町、これ寝屋川なんですけども。大きな被災経験は今までなかったこの寝屋川市っていうのは摂南大学がある町なんですけども。

住田 コーディネーター

ちょっと水が出たりという経験はありましたが。

浅野 准教授

去年ですね、水が出ました。

住田 コーディネーター

大量に人が亡くなるというのではないですね。

浅野 准教授

ないんですね、今回はこの災害時は地震災害をちょっと想定しています。その中で被災経験のないこの学生ですね。私もそうなんですけども、全員が防災のプロじゃなくて私はボランティアを教えるという先生なんですけども、学生は将来的に先生になると。なんだけども防災教育って全く何も知らない。それからここに来ているセミナーの子供たちなんですけども、一応寝屋川の広報でこういう防災教育するので、やりたい人来て下さいという事で70人ぐらいの中高生が集まってきました。これがあの被災経験の前に住民の子供ですね、それで一緒に手伝ってくれるのが寝屋川の市役所とか、それから教育委員会という形です。そこを何が始めたかという先ほど言いましたように命の大切さで、自分たちで命の大切さを学んで、これはボランティア・スタッフズなんですけども、そしてセミナーの開催というふうにもってってました。すいません、次お願いします。この中でボランティア・スタッフズというのは自分たちで中高生にいろんな情報を発信して、そして中高生を育て、その中高生が将来的に、林先生が先ほど言っていた、ある程度歳をとってきた時に地震が起こるんじゃないか、その時に何か出来るリーダーを育てなきゃなんないっていう。

住田 コーディネーター

社会の中心になってる可能性がある。

浅野 准教授

そうですね、子供たちであろうと。これは中高生も含んでいるんですけど実は大学生のリーダーも含んでいるということなんですね。それを地域に発信していこうという形でこういったその自助共助、自助。それから共助、公助という形でよく文科省がやられてるこの形でやってきました。こういった事をやってるうちに先ほど滝さんが言われた、当たって砕けろって、もしかしたらうちのボランティア・スタッフズの事じゃないかなと思うんですけども。いろんなことをやりたいといって学生自身がですね、こう教育委員会とかその市役所に行くんですね。当たって砕けちゃってるんです。

住田 コーディネーター

学生さんが。

浅野 准教授

はい。玉砕で帰ってくるんですね。やっぱり学生なのであまり知識もないし、そういったところで役所に行って飛び込んでいったんだけど、何言っとるの？ということで、全然

企画力もないという形で1回帰ってきてみんなでもう1回勉強をしてそれから何度か何度か当たって砕ける。ほんとに当たって砕けるなんですけども、当たり前ながら。そういうした内に1つだけですね、やって気付いたことがあるんです。すいません、次のスライドお願いします。災害直後というのは行政は、これ役所の方が言われたんです。役所の方ですね、担当者の方が「行政は機能しないよと、そんな時に一番地域の人たちに役立つのは君たちのような毎回防災を考えてやっている青少年リーダー。または地域で防災をやっている人たちなんだよ」ということを聞いてそれが実はですね、もっとも頼れるのは常に災害を意識してる君たちだっていうその言葉を聞いて彼はすごく奮闘。

住田 コーディネーター
自信持った。

浅野 准教授

自信持ちちゃったんですね。それで私たちの活動や行動というのは正当性があるんだなというそういうところを身に感じました。その中でよく言われるPDCAっていうサイクルを繰り返しながらやっている。すいません次のスライドお願いします。これはボランティア・スタッフズのもっとほんとはたくさんいるんですけども、女の子と男の子、それからこれは3年生と4年生の中心になってる学生。

住田 コーディネーター

何か女性のほうがたくましそうに見えるんですが、これは前にいるからですかね。

浅野 准教授

たぶんちょっと前で組んでるからと思うんですけども、いつもこういう形で活動。その中で、すいません次、お願いします。必ずやる前とやった後っていうのはポートフォリオで成長記録を取ってたんですね。そうするとよく分かるように始めのほうはですね、ポートフォリオの中で意識は非常に低かった。でこのボランティアリーダーセミナー、1年間、2年間ずっと続けてやった後に、最後にですね、去年の12月にこのもう1度ポートフォリオ、成長記録取ったときに、中の広がりが非常に大きかったというこれが大きな成果だと思います。

住田 コーディネーター

これは、ちょっと待ってください、緑がスタート地点、青いのが中間のとき、赤い線は全国誌記載後と書いてあります。これどういうことだったんですか。

浅野 准教授

あのですね、実はあちらこちらですね、新聞に取り上げられたんですよね。例えば防災甲子園ので奨励賞をいただいたとかっていう後にちょうど取った、たまたまその時期に取ったんでこうなったんですけども。この大きな心の広がりとか、それから企画力とか推進力ってそういったその子供たちが成長した後、それから学生リーダーもそれに伴って成長したというこれは証ではないかなということなんです。すいません次のスライドお願いします。この次なんですけども、まずは君たち何必要なのっていうふうに気付き、この気付きのところで先ほど役所の方に言われたもっとも頼れるのは常に災害を意識している君たちだっていうところの気付きがあってそれが少しずつだんだんやる気になって積極的な行動になっていったという形に今のところなっているんですけども。さて災害が起こった時にこの小中学校の、中高生が災害に行くとか、大学生が災害に派遣するという意味でこれをしてるわけじゃなくて、自分たちの命を守って、家族を守って地域を助けようという、こういう広がりの中でこういった活動をしています。1つだけポイントあるんですけども。

住田 コーディネーター
ポイントが。

浅野 准教授

やっぱり中高生も大学生もですね、学校が、学校に行くのが義務なんで、災害がさて起こった、中高生とか学生リーダーをその災害に派遣できるかっていうと、そこら辺に非常に大きな問題がある。特に中高生なんかは授業ガチガチ。ただし大学生の中でも3年生・4年生だったらある程度授業がないのでそういったとこに派遣できるかなと思うんですけども、やっぱり長期間は無理だということですね。こういう形で、すいません、もうスライド OK ですけども。いろんな形でですね、その学校での防災教育とそれから地域での防災力アップと2つのものを重ねて今のところやっています。

住田 コーディネーター

なるほど。一言添えていただきたいんですけど、その具体的にそのボランティアリーダーはどういうことを彼らは学んでいるんですか。具体的には。

浅野 准教授

先ほど先生が言われたんですけども、野外活動というのをまずさせます。

住田 コーディネーター

野外活動。

浅野 准教授

野外活動をさせて、そして彼らにはですね、ちょっと危ないんですけども、包丁を持たせたりします。包丁を持たせて、やっぱり包丁を持たせちゃうと手を切ったりするんですね。そして切った時に「痛い」というこの思い。だから災害があったら痛いんだよっていう思いをまず少しずつ芽生えさせていく、そういうポイントでいきました。昨年の夏にはですね、寝屋川には1つ廃校がありまして、この小学校の廃校なんです。その廃校にですね、この子供たちと大学生リーダーどんと入れて、「さあ災害が起こったときに君たちはこういった形で避難所生活をするんだよ。自分たちで一旦避難所、避難、避難民になってみなさい。そうした時にどういった形が一番自分たちにうれしいかというのをまず考えなさいと、感じなさいと。そして今度は、次の日はではその被害者、災害者、被災者たちの気持ちをどう助けてやれば皆さんはいいのかというマネジメントを考えなさい」というようなそういった教育を少しずつしていきました。

住田 コーディネーター

そういう避難所の中でどういうふうにボランティア機能するのか。

浅野 准教授

そうですね。

住田 コーディネーター

そうすると避難してる人は心の支えになるのかということを経験していくという具体例ですね。

浅野 准教授

そうですね。

住田 コーディネーター

今ちょっと問題が投げかけられました。そのいざという時そのボランティアを派遣するかですね、そのいわゆる被災地域の中で勉強はちょっと置いて活動をするっていうこの切り替えっていうのは諏訪先生どうなんでしょうね。

諏訪 教諭

私の学校もよくボランティアに行ってるんですけど、被災地の被災直後に入ったのは2回で、これはやっぱりその例え水曜日に災害が起こっても土日に入りましたね。水曜日に起こって水曜日に高校生が入らなければどうしようもないんじゃないかって、土日でもやることがありますので土日に行きます。

住田 コーディネーター

それは具体的に何地震のときでしたか。やっぱり水害。

諏訪 教諭

例えばですね、能登半島の地震のときに門前に入ったのが地震から 2 週間後の土日でしたか。それから 2004 年の台風 23 号に豊岡・洲本に入ったのが、あれはね確か木金と中間テストで土日にボランティア行って月火に中間テストだったんですよ。

住田 コーディネーター

ちょっとテストの合間で難しい時でしたか。

諏訪 教諭

いや何かニコニコしてやってましたよ。

住田 コーディネーター

そうですか。

諏訪 教諭

そういうふうに行ける時に行くというのが1つと。

住田 コーディネーター

なるほどね。

諏訪 教諭

それから現場に行かなくても遠くから募金を集めるとか、あるいは半年、1年、1年半後に被災地に入って仮設住宅の年寄りと高校生がお茶飲みながら世間話をするみたいな交流的なボランティアも出来ますので、僕は中高生が無理して何も学校休んでいく必要もないと思うし、もっとちょっと怒られること、極端なこと言うならば、大学生やったら適当にサボって行って来いと。3日や1週間大学サボったからってそれに怒るような教授の授業はちょっとボソボソと言いますが、昔の大学生ってもっと授業サボったもんですけど、大学の先生の許可を得なければボランティアに行けない人がボランティアに来て、現場に来て何か役に立つのかなと。もう先生を説得してでもですね、僕ら行くんだと言う大学生に僕は期待したいなと思いますがい過ぎですかね。

住田 コーディネーター

どうでしょうその辺。ただ何か安心して行きたいという気持ちが学生さんにあるのもね、

確かなんですけど。

浅野 准教授

私のここではどういう活動にしたかという。ボランティアをですね、大学の公認団体にしたんですね。

住田 コーディネーター

なるほど。

浅野 准教授

公認団体という例えばその野球部とかラグビー部というのは大学の授業中にですね、対外試合に行くわけなんですね。対外試合に行くと大学の先生のところですね、こういう形で試合に行きますから休みますというようなカードを持ってきますね。

住田 コーディネーター

必須の授業でもまあちょっとそこは勘弁してもらおうという。

浅野 准教授

大学としてはですね、それを出席にするのか出席にしないのかって、先生にお任せなんですね。ですからこのクラブを公認団体としたのは、災害が起こった時に例えば3日間・4日間大学休んでその手伝いに行くんだよというのは対外試合になるんじゃないかなと、勝手な思いでですね公認団体にすればこのカードが出せるんじゃないかなという考えで出しました。ですからこれちょっとこれからは他の大学もそう思うんですけども、こういう活動に参加するということにとってはですね、各大学とか高校もこれからこういったところはやっぱりブレイクスルーのポイントでいろんなところで声を大きくしてですね、やっていかなきゃなんないなというふうに思っています。

住田 コーディネーター

なるほどね。文科省の滝さんいかがですか。文科省としてもこういった生徒、学生さんがね、行きやすい環境っていうのは大切ですよ、ボランティアに行きやすいというね。

滝 課長補佐

これは当然ボランティアということも政府挙げて取り組んでおりますので、非常に重要な事だと思えます。ただその時に、行く時になってから行くということだとなかなか周りを説得するの大変というのありますので。例えばなんですけど、やはり事前にですね、今の平常時から周りの方に呼びかけをして事前に話をしておけばもしかしたらもう少し上手

くいけるんじゃないかという期待もありますので、やはり関係する方々は利害が関係していますので、その時にちょっと待ってくれ、こっちのほうも向いてくれっていうふうな話をされるかもしれませんので。そういったことで言うとやはりボランティアに行く時に皆さんと調整してからいくという事を非常によろしいのかなと思います。やはり学生さんのやる気というのをいろんなところから活用するってこと 1 つのいい事例でないかなと思います。

浅野 准教授

もう1つ。

住田 コーディネーター

どうぞどうぞ。

浅野 准教授

あのですね、そういったその高校生でも大学生でもそうなんですけども、訓練だけをするんでなくて、やっぱり学生に対して出番を、その訓練。主役ではないんですけども、そういった訓練の出番を作っていただくということは非常に大きい要素の1つでないかなと。だから常に訓練するんじゃなくて、そのどういう形でそういった防災訓練の中にかかる。それでその中に主役になっていくということが本人たちのやる気、それから気付きのほうに大きな働きをかけるんじゃないかなと思うんですね。

住田 コーディネーター

事前に平時からいざという時こうしますという話を学内、あるいは校内で決めておくという事は必要でしょうし、今出番を考えておくということありましたが、諏訪さんこれは事ボランティアに限らず先ほどからお話が出ているいろいろな例えば地学を研究したり国際的なことに打って出たりと思ってる子がいたりいろんな子たちが教室の中で完結するのではないということは大切ですね。

諏訪 教諭

そうです。出番というのはいいい言葉やなと思って、またどっかで使わせて下さい。僕がずっと言ってるのは活躍をする場のプロデュースという、それが大人の仕事だろうと。

住田 コーディネーター

活躍の場のプロデュース。

諏訪 教諭

防災に関わる大人の仕事だろうと。高校で防災を教えた、大学で教えた、でも君たちは教科書で学んだだけです、学校という場で学んだだけです。じゃなくって、実際にワークショップで発表してもいいし、ボランティアについて行ってもいいし、何か自分がどっかで活動をした、それに対して例えばですね、新聞が好意的に書いてくれた、NHK が特集してくれた、もう小市民ですからみんな喜びますよね。つまり活動を大人から褒められた、そういうところで子供たちというのは達成感を身に付けると思うんです。やっぱりその達成感ってというのは自分を肯定的に見る力になってきますから、その自己肯定感を導き出すためにも先生のおっしゃったその活躍する場。

住田 コーディネーター
出番。

浅野 准教授
出番。

諏訪 教諭

ごめんなさい活躍する場僕が言うたんです。出番というのはですね、大人が作ってあげる。例えば地域防災でも地域の人が上から教えるんじゃなくって高校生・大学生に丸投げをしてそこでやってもらうような場所を、地域の人を作るみたいな、出番作りが大事だと僕は思います。

住田 コーディネーター

なるほど。つまり地域防災の集いがあると、じゃあ君たちでちょっと発表したら、今までのパネルとかね、パワーポイント使ってやったらと言ったら彼らはどう伝えようかという出番がそこに出てくるということですね。それと今僕はちょっとこれもいいなと思って、ヒントになったのはメディアを使うというのは大変大切なポイントで、私も大学生たちといろいろやり取りした時に、そのメディアが取り上げてもらったらですね、彼らはやっぱりその自分たちがやってることは間違いなかった、これはまさに浅野先生がおっしゃった事なんです。それが社会的に認められたんだ、間違いじゃなかった。あるいは周りから言われるからやってるんじゃなくて、自分たちがやったことが社会の役に立つというのはメディアに上手くこの自分たちの活動を知ってもらって取り上げてもらうということは大切なんですがなかなか自分から言い難いので、これはやっぱりその指導されてる方ですか、あるいは地域のリーダーの方が、あの子たちこんなのやってるよというのはメディアにリリースをかけると言いますかね、ちょっとファックスでこんなのやってるっていうの知らせるとかですね。知り合いの記者に伝えるとか、そういったことも必要なというふうに思いました。防災のその学校教育の現場という話を進めて参りましょう。もうちょっと

と時間が押し気味になって来ましたので、後半その地域とですね、学校の防災教育をどうつなげていくのかいうところに行きたいと思うんですが。大阪府の森井さん、大阪府というのはですね、その地域防災組織の活動、あるいは地域でのその防災を教え合うということとは活発なとこなんでしょうか、どうなんでしょうか現状は。

森井 課長

そうですね災害時、大規模災害のときにですね、我々行政とかそれから防災関係機関ですね、これは対応をするというのは元よりですけども、やはり被害を最小限に食い止めてそして応急対策、復旧復興を円滑に速やかにするという上ではやはり先ほどのいい話、いいお話が出てます自助・共助ということが大変重要になってくると思います。いわゆる地域防災力ということなんです、そのそれを図る指標の1つにですね、今皆さんおっしゃられた自主防災組織ということですね。その組織率をちょっと紹介をさせていただきたいと思んですが。

住田 コーディネーター

組織率どれぐらいですか。

森井 課長

阪神・淡路大震災の前はですね、大阪府でいいますと、もう10%に届くか届かないかという状態でした。それが現在去年の4月1日現在ですが、74.6%というところまで上がってきております。ちなみに全国の平均が71.7%ですので、全国平均を少し上回ったところということで率だけを見ればまずまず進んできてるなということなんです。

住田 コーディネーター

なるほど。会場で大阪府内から来られた方手を挙げて下さい。大阪府内から来られた方。その中で自主防災組織というのは近所にあるよっていうの知ってる人、そのまま手を挙げて下さい。結構比率として、今日、ありがとうございます。おそらくお越しになってる方はそういう関係の方も多いからかも知れませんがね。

森井 課長

そうですね、ただですね。課題もいろいろありましてですね、例えば1つはその組織率も高いところは100%ですが、まだ未結成の市や町も2つほどございますし、低いところですよ一桁台というようなところもございまして、1つはバラつきがあるということですね。それからリーダーになっていただく方々がなかなか、どう言いますかね、例えば自治会の役員さんが自主防のリーダーもやっていたらいいとか。

住田 コーディネーター
兼任とかね。

森井 課長
そうですね、地域でいろいろ活動してくれてる方のところへどんどんどんどんいろんな役割が。

住田 コーディネーター
集中しちゃう。

森井 課長
集中してるというような課題もあるように見受けます。そしてその結果リーダーになっていただく方が高齢化をされてるという実態ですね。もちろん高齢者の方がそういう形で頑張っていた、それはもうありがたいことなんです、やはり先ほど先生方のお話もありました、やっぱり若い世代の人も、各いろんな世代の方がですね、満遍無くやっぱり関わっていただくということが大事じゃないかなというふうに思ってます。そういう意味では防災教育、学校現場における防災教育もそうですし、地域における防災教育、そのことが益々重要であるというふうに思っております。

住田 コーディネーター
実は会場からの質問にもあったんですけども、その教育委員会系の、つまり学校教育系の部署とですね、その危機管理室系のその部署とのですねリンクの度合いというのはどうですか。

森井 課長
そうですね、もちろん私も大阪府では危機管理部局と教育委員会とは連携はさせていただいておりますが、先ほど言いましたように、現時点ではうちの職員が学校現場へ入らせていただいているところまで発展してないのが現状です。府から見ますといくつかの市町村ではそういうことをやっていただいているところはおそらくあるというふうに思っております。あるいは役所の防災セクションの方だけでなく地域の消防団の方とかあるいは婦人防火クラブというですね組織もございますので、そういった地域の防災組織のリーダー的な方がいろんな機会を使って学校へ入らせていただいている、直に子供たちに話をさせていただくような、そういう場の提供ですね。これはもう既にいくつかの市町村であると思いますが、それをもっと広げていきたいなど。そのためのつなぎの役割を私ら行政の者ですね、やらせていただくというふうに考えております。

住田 コーディネーター

実は私、堺に住んでるもんですから堺のそういう防災の方々の集まりに、寄り合いにお邪魔したりですね、あと府のそういう自主防災組織のセミナーということで府の北部の高槻辺りですね地域の皆さんのところ、ご一緒したことあるんですが、やっぱり皆さん60以上の方がほとんどです。一方でその若い人たち昼間ですね、やっぱり学校、中学・高校、あるいはいろんな事業所がですね、その町にはあって、その若い人たちの力を実は昼は借りればない部分もあるんですが、そのつなぎの部分ですね、コーディネーションですね、そこが今一歩ちょっと遠慮してたり分からなかったり、その辺上手く交流する事例とかですね、あるいはこのきっかけ、こないしたらいいん違うかみたいなヒントは他の皆さん何かないですかね。是非この大阪府の森井さんにそこをね、託してこんなんでしょうかというのはいかかですか。

諏訪 教諭

地域が、若い人がどう入ってくる。

住田 コーディネーター

はい、そのいわゆるその学校とかその若い人たちの職場とか地域とか。

諏訪 教諭

いくつかね、例をちょっと挙げて。

住田 コーディネーター

お願いします。

諏訪 教諭

神戸市はですね、阪神・淡路大震災の後、震災の教訓から防災福祉コミュニティーっていうものを作ったんですね。

住田 コーディネーター

防災福祉コミュニティー。

諏訪 教諭

それは地域が備えてなくて防災力なくて素手で瓦礫に立ち向かったけど助けられることの出来なかった命がたくさんあったと。それをもっと減らそうという事で作ったもので、小学校校区に1つ防災福祉コミュニティーがありました。ですから自治会とは少し線引きが違ってくるんですけども、そこでですね、舞子高校の周りがある4つの小学校校区、つま

り 4 つの防災福祉コミュニティとお付き合いしてるんですけども。やっぱりおっしゃるように役員さんが年に 1 回、何て言いますか、訓練のために義務的に出てきて消防の方と半日時間を過ごして終わるといところもありますけれども、そうじゃなくてもものすごい熱気むんむんのところがあるんですね。

住田 コーディネーター
熱気がある。

諏訪 教諭

何故かっていうと中学生のバンドと消防の音楽隊と一緒に演奏をすると。すると親も爺ちゃんも婆ちゃんも子供・孫の勇姿を見に来るわけですね。

住田 コーディネーター
そうですね。

諏訪 教諭

炊き出しがあってそれで終わりかなと思ったらそのあとお楽しみ抽選会ということで、酒も焼酎も何でも当たるんですよ、3人に1人は当たると。つまり何か大きなイベントとしてしまってそこに若者も活躍しているし、実はその防災訓練のリーダーは全部うちの生徒がやらしてもらってるんですけど。高校生がリーダーをして、そしてお楽しみもあるということなんです。先ほど堺とおっしゃいましたけど、堺でも同じような事やまして、堺で学校避難所開設訓練やるから来てくれという事でうちの生徒も行ったんですが、何百人かの河内のおっちゃん、おばちゃんが体育館に避難してくる。いくつかの町区ごとに分かれてもらって、そこで避難所とはどういうもので何に注意をしてどういうことをするんだということのレクチャーをうちの生徒がすると。すると地域の方がですね、そのレクチャーの中身がどうこう言う前に「若い頑張ってるやん」ということで何か来られた皆さんももうちょっと頑張らなあかんと、元気ださなあかんと、うちも若い入れなあかんとということで帰っていかれると。堺ですから摂南も近いし、今度は摂南大学に入ってもらおうと思うんですけども。そういう形でやるとですね、つまり防災だけでやるんじゃなくて、プラスアルファをつけながら地域の人が楽しめるような行事にすると長続きするし元気も。

住田 コーディネーター
ちょっとイベントとまぶすみたいな。

諏訪 教諭

そうですね、それが防災だけで終わるんじゃなくて、夏祭りも呼んでもらえるし、小学生相手の地域探検クイズラリーなんかも呼んでもらえて、年に何回か一緒に交流できると。つまり地域にそういう策士がおられるんですね。そういうところをやっぱり元気かなという気はします。

住田 コーディネーター

仕掛け人ですね。いかがですか。

浅野 准教授

私、摂南大学というのはその大阪の北のほうにあるんですけども、来てる学生っていうのは大阪府の学生、大阪の学生それから京都、滋賀とかそれから兵庫とかから来てるんですけども。学生を見てるとですね、大阪の市内から来ている学生のノリが普通の学生の全然ちゃうんですね。

住田 コーディネーター

ノリがいいと。

浅野 准教授

ノリがいいんです。そういうノリはですね、おそらくここに来ておられる皆さんも大阪に住んでる方のノリというのは非常に大きいのでそういったところを使いながら、やっぱり乗らせてしまうというのが1つのアイデアかなというのはあります。

住田 コーディネーター

最初にお勉強おいでと言ったらみんなね、ちょっとカチンとカチカチとこうなってしまいますからね。

浅野 准教授

そうですね、吉本に来ていただいてね、それで防災やっていただいたらもしかしたらみんなのるんちゃうかというふうに、学生は一言言ったことがあります。もう1つなんですけども、今日ちらっと見えたらここに青いですねジャケットを着ておられる方がぱっと目に付いたんですね。

住田 コーディネーター

いらっしゃいますね。

浅野 准教授

おそらく確か防災士の方だと思うんですけども。こういった今日の教育をして、活動したら本人たちはやっぱり僕たちは防災のプロじゃないと、何とか勉強したい。ただし私たちの学生、私が教えてる学生、外国学部の学生なのでそんな防災の勉強出来へんということで昨日・今日・明日とですね、大阪市内でですね防災士の勉強会やってまして、3日間防災士の資格を取るための勉強に出ると。そうゆうのどういうところからきたかというやはり自分たちが気付いたわけなんです。こういうことをやるにはやはり素人では駄目だと。少しでも知識をつけたいというそういった気付きがあって、そういった環境を作ってあげるといことが私たちその大学人とかそれから教育機関がやはり持たないと、おそらくシューンと。そのうちにドカーンというほんとの痛さが来てしまうので、その痛さが来る前にやっぱりそういう痛みが来るんだよという環境作りを教えるか、そういう場所を提供するのが重要じゃないか。だからこういったフォーラムというのは非常に重要だと私は感じてます。

住田 コーディネーター

ありがとうございます。かなり皆さんに早いテンポでお話いただいたんですけども、これでも時間もう実はオーバーしかかっておりまして。最後にですねじゃあ、ここまでの話を受けてまず大阪府の森井さん、今日は何かヒントになることありましたでしょうか。受けたお話をちょっと1ついただけますか。

森井 課長

そうですね、ありがとうございます。やはり若い方のね、先ほど先生方おっしゃっていただけてます若い方々の力、パワーをですねやっぱり地域防災の中にどんどん取り入れるというんですかね、ことがやっぱり重要だというふうに再認識をいたしました。今日も打ち合わせの段階でも先生方からもいくつかご提案をいただいて、学生さんをですねどんどん大阪府がやるですね、防災訓練なんかですね、参加をさせてほしいとか、いろんなご提案をいただきましたので、そのことをですね、是非とも今日のいろんなやり取り踏まえた上で形としてですね、実現をしていきたいなと。理念としては大変よく分かる、それはやっぱり実現をしていく必要があると思いますので私どものほうで是非ですね、市町村の方とも連携をしながら、あるいは教育委員会の方と連携しながら、学校現場のねお力も借りながらですね、是非実現していきたいというふうに思っております。

住田 コーディネーター

是非地域防災盛んやという地域のリストとですね、教育委員会のこの先生、学生さんは熱心よというリストつき合せて、どっか1つモデルケース作るとあそこの堺はうまいことやるとか、高槻うまいことやってるよみたいなね。そっから広がる可能性ありますよね。

森井 課長

そうそう。

住田 コーディネーター

是非それを実行にね、皆さんでね移していただきたいと思います。文科省、滝さんいかがですか。

滝 課長補佐

そうですね、やはり若い力というのについては私先ほど触れた時ね、話させていただきましたが、やはり進めるにあたって、各団体ごとに何か、やはり大義名分っていうんですか、何かそれを求めなきゃいけないのかなと。我々はこうやるんだからやりましょうよという形でしょうか。そういったものを立てていただいた上で進められてるのかなという気がいたします。やはり意味ある、その活動が意義があるということについては意味をよく考えた上で進めていかなきゃいけないと思いますので、やはりそれが一番何か重要な活動に結びつくのではないかなということと、それからやはり皆さんの活動を伺ってますと、やはりどれも単一組織で何か成り立っているようには見えません。つまり必ず周りの人たちを巻き込みながらですね、どんどんどんどん進めていくような感じがあります。やはり生活の場で災害というのは起きますからそれを乗り越えていくには皆さんの協力がなくては当然出来ないというのは当然だと思んですけど、それから考えれば自分たちの組織だけじゃなくて組織の隣同士とかそういったところと手をつなぎ合って進めていく。そのためにもやはり扉は叩かないと開いてこないかもしれませんで、それが乗り越えるための1つの機動力とかきっかけになるのかなという気がします。私も実はこんな話しながら文部科学省といったら教育というふうに見えるかも知れませんが、確かに教育で例えば先ほど林先生にもありました大局、スポーツ局がですね、保健体育ということで防災教育、安全教育やってるんですね。

住田 コーディネーター

そうですね。

滝 課長補佐

そこで交通安全とか防犯とか全部やられてるんですけど、そこを中心にやりながらも私どもの練り上げるときにやはり相談してですね、そういった結果、じゃあ賞をあげてあげましょうよということで、他の例えば公立学校の耐震化やってる部局とか、それから家庭教育ですね、学校のそのカリキュラム作ってる部局とかですね、いろんなこと連携しながら始めたんです。ですからやはり始めれたってまずは周りの知恵を拝借しながらとか、相談しながらってということで文科省まとまったら結果的には政府全体の、内閣府防災担当と

か国交省とか消防庁とか他のほうも声をかけながらやったりとか。それから大学でもやはり林先生の防災研究所とかですね、東大地震研とかそういったところと一緒に、つながりを持ちつつやり始めましたので、そういった点ではやはり広く頑張っていくという事が重要じゃないかなと、私自身もそういうふうに認識しております。

住田 コーディネーター

総合的な学習の時間というのもだんだんまたやり難い環境になってきてますね。

滝 課長補佐

そうですね、中央教育審議会で学習指導要領、変わるということで、変わりましたので。ただ今ありました総合的な学習の時間というのは実は減ってしまったんです。その場で防災教育とか環境教育とかいろんな事が出来たんですけども。ただそういった残念な事がある一方で実は学校安全、その防災教育というのは横断的に取り組む事項の1つに取り上げていただきました。これは義務教育の中で例えば国語とか社会みたいに必ずやらなきゃいけないということではなくて横断的に取り組むべきという位置付けをいただいたんです。それによって環境教育とかですね、食育とかあぁいった教育と同じようにですね、重要な位置付けは得られたのでそれからもっともっと盛んに出来る機会があると思います。

住田 コーディネーター

是非保健体育の時間で防犯と兼ねて防災も考えたとか、家庭科の時間でその防災の時のその食事をどうするか考えたとか、横断的に編み出す事例をどんどんこう提示してこんなのあるよと言ってほしいですし、その防災に熱心な先生が評価されるという環境作り、これは実はいろいろ聞こえてきてますので、その辺是非よろしく願いしたいと思います。林先生いかがですか、ここまでお聞きになって。

林 教授

いくつかポイントあると思うんですけど、1つは防災教育を自分が教えられることを防災教育だと思ってしまうことが結構阻む理由になってること多いですね。その全部の事を知ってる方っていうのはおられないし、逆に防災っていうのは非常に幅の広い知識を必要とするので、自分の中に抱え込もうとすると多分失敗していくんだろうなと。今日ずっとお話を聞かしていただいて、浅野先生と諏訪先生というのは、冒頭申し上げたやつで言うと担い手となぎ手の中でいうとですね、つなぎ手の典型的な人ですね。自分たちが何かやるというよりは、いろんな人たちを動かすいろんな力を集める、そういう仕掛け作りをして下さる、こういう方の存在というのがこれから防災教育を推進していく上で非常に重要になってくるだろうと。ただ余りこう学校のほうの中で語られなかったのは実は、先生方、大学の先生方、高校の先生方どうしてもそこら辺が今日の話の中心になったんですけど、僕は防災

教育と言うのはせいぜい小学校までじゃないかと思ってるんです。幼稚園、保育園、小学校というのが一番一生懸命出来るんじゃないかと。何故そんな事いうかというと、小学校までは担任の先生がいてくれるわけですね。それから中学以降になると基本的には教科の先生が入れ替わり立ち代わりという、今日本の教育の仕組みそうなってますんで、やはりその担任の先生がいる中で言ってみれば全部の教科を教えられるわけですね。そういう中にその防災についての関心というようなものを織り込むことが比較的織り込みやすい。ですからそれが中学や高校になると総合の時間といったようなね、特別の枠を設けないとそれが利用出来ないようになるわけですが、ある意味では日常的にその先生の形骸に触れるというような形でいろんなものが学んでいけると。そういう意味では幼稚園や保育園、実はこれ幼稚園は文科省だけど保育園は厚労省だったりするんですけれども。そういう若い子供たちに接しておられる先生方にその防災教育をもうちょっと試していただけるような負担の軽減をこれから目指していくというのが学校の側では 1 つ大きなポイントだと思うんですよね。それから地域の中で考えていくとこれはやっぱりイベントの力というのに頼らざるを得ないのかなと。そのなかなか恒常的に集まって何度も何度もという事はできませんからだいたい長くて 1 泊 2 日ぐらいの時間の中で、いろいろな年齢の方たちが集まって下さってその中での体験、様々な体験を通して学んでいくということなんじゃないかな。これについても実はですね、そういうのを担って下さるリーダーというのは実は有限なんだ、誰でもがリーダーになれるわけではなくて、やっぱりリーダー星みたいな人がいてですね、その人はやはりどういう状況になってるかということ、いろんな事を兼ねてるんですね。例えば大阪でいえば防災のことは府の防災の話をしてる人がいる、今度は防犯になると警察がまた同じ人と話をしてる、また福祉のことで同じ男の方に話してるようなことがやっぱりあるんですね。

住田 コーディネーター

1 人の人に集中してると。

林 教授

集中してるというと聞こえが悪いけど、やっぱり 1 人何役もやはり担っているのがリーダーの本質のような気がしますね。

住田 コーディネーター

なるほどね。

林 教授

それは正しくさっきの諏訪先生や浅野先生のようにつなぎ手をやってもらうようになるとどうしても役所とかね、いろんなものというのは縦割りですから、その自分たちが出来る

ものはこうですとは言えるけども、その地域にあったようにそれをこう組み合わせたり織り成したりすることはやはり出来ないんですよ。だけど素材は提供できるし協力も惜しまないということであればそういうその地域に有限、大事なリーダーをしっかりと見つけてそこを育てる努力をする、そのときには防災防災とケチなことは言わないでもいろいろな事をやっていただいて、むしろその活躍の幅を広げてね、そのリーダーとしての自覚と責任と技能みたいなものをほんとに高めていただくことがいいんじゃないかと。どっちにその学校の担任の先生もそうだし、その地域のリーダーになるような方もその共通して言えるのは防災はある意味では機能で思ってもらった方がいいんじゃないか、自己目的化しないほうがいいんじゃないかと。やっぱり生きてく上でいろんな問題が起きますから、最終的にはその問題を解く力を持ってもらわなきゃいけないわけだからその中にいつも安全だとか安心だとか、そういう観点をね加える、それを一番最初にみんなが経験できるのは自分の住んでる周りの、その特に自然が猛威を振るうような中で自分たちをどうやって生き抜いていくのかという課題になると思うので、そこら辺をコアにしながら防災に留まることなくですね、安全安心な暮らしというものを自分たちで実現できるような力になっていくと、遠回りしてるように見えるかも知れませんが、ほんとの意味の地域の防災力というのは上がるんじゃないかなという気がいたしました。

住田 コーディネーター

地域でお祭りがあるでしょう、学校行事もあるでしょう、そういう時にその防災という事だけを立てたものではなくてもありとあらゆるその催し物やみんなで行動する時にほんの少しその、ここでもし地震があったら、あるいは火災が発生したら団地の自治会でもそうですけどもそういうことをちょっとずつ織り込みながらやっていく、つまり生きていく上でのベースなんだという考えとして防災ということを自然に組み込んでいくということは大切だろうということですね。

林 教授

そうですね。みんなで作ってご飯食べようじゃないかといったらある意味では炊き出しなのかもしれませんし、どっかで誰かが怪我したら、おーいと言ったらそれは救急救助になるのかもしれませんし、あそこでお婆ちゃん怪我してるぞ、大丈夫かみたいなこと言うと要配慮者への支援なのかもしれないので。その頭から入るというよりはやっぱりいろんな局面の中での課題解決であったり問題解決の場面が防災のことをしていればより鮮やかに出来るとかね。あるいはそういう体験を通して防災のところであとで聞いたことが、ああ、ああゆうことだったのかとふに落ちるとかね。だからいろんな体験とその知識や何かを誰かがつなぎ合わせてくれるようにすると力がいっぱい出るんじゃないかなというふうに思うんですね。

住田 コーディネーター

学校を休んでいる地域でいろんなアクシデントあるでしょう。アクシデントやハプニングが起こるたびにそこからちょっと議論を広げていくということも必要かもしれませんね。さあちょっと時間になりましたので会場からの質問をここで受けたいと思います。よろしいですか。まずこういう質問が来ています。「防災教育における教材の公開について何処にどんな風な物が公開されているのか、資料やマニュアルはあるのでしょうか」という、こういうお尋ねを会場からいただきました。これについてはどういうところにそういう資源があって取り出せますよというヒントをいただけますか。滝さん。

滝 課長補佐

冒頭ですれ紹介させていただきました先ほどのチャレンジ・プランとか、それからマップコンクールとかですね。それから防災甲子園ではちょっと少し展示になってしまうかもしれませんが、そういったところに教材のヒントがあると思います。特にチャレンジ・プランさんのところはですね非常によく載っておりますのでそれをヒントにさせていただくとか。それから。

住田 コーディネーター

チャレンジ・プランというキーワードで引けばすぐ出てきますね。

滝 課長補佐

はい、引いていただければすぐホームページで見れます。あと手前みそですけど私どももこのフォーラムやってる事業とかを通じましてですね。実は全国、今 8 地域、地域の事業を展開して各大学とか地域の方が中核になっていただいで進めさせていただいてます。それもまもなく、既にホームページ設置してるとこも個別にあると思うんですけど、そういったのをとりまとめてまた成果配信させていただきたいと思いますのでそれらもご活用の見込みということでお考えいただければと思います。ですので、意外にそのホームページ等を探していただくと載ってる事は載ってるんですが、それは 1 つのちょっとネックになるかもしれませんが、著作権とかですね、そういった面で自由に使えるかどうかというのを確認していただくことが重要かもしれません。それで自分に合ったものを見つけていただくかあるいは自分でそれをヒントに作っていただく。それがやはり地元の、地域で活躍しやすく、活用しやすいコンテンツとなると思いますので、出来れば私どもも今これやっています防災教育推進プログラムの中で作っていくコンテンツというのを全国発信しながら 1 つのひな形としてですね提供させていただいて地域にあったテンプレートという型枠にさせていただいたものでそれに当てはめれば地域にあったもの作れるようなもの。そういった。

住田 コーディネーター
ひな形みたいなものですね。

滝 課長補佐
ひな形ですね。ひな形のイメージを作り出していきたいと考えておりますのでこれから私どもちょっとホームページのほうも参照していただければと思います。

住田 コーディネーター
それ以外に何か今のことで一言添えたいとおっしゃる方いますか。いいですか、あと困ったら諏訪先生に電話してもいいですね。全国唯一の舞子高校、環境防災科ね。

諏訪 教諭
学校でもお前はよく捕まらんと怒られてますので、ファックスのほうありがたいですね。

住田 コーディネーター
舞子高校にファックス、諏訪先生お尋ね、こんなのどうしたらいい。是非また相談乗っていただきたいと思います。それからもう1つだけいきましょう。「地域の防災組織に対してどのようなその働きかけを行ってリーダーを作っていけばいいのか悩んでいます」ということですが、こういった地域防災のその組織についてですね、どのように組み立てた方がいいのか悩んでらっしゃる方に森井さん、一言アドバイスをいただけますか。

森井 課長
そうですね。これから自主防災組織を作るとかそういう時にはですね、それぞれ市の防災部局、あるいはうちのほうにご相談いただきましたらそういった手引きのような冊子がございます。それはそれで。

住田 コーディネーター
大阪府の部局の名前をちょっと教えていただけますか。

森井 課長
大阪府、私どもの危機管理室。

住田 コーディネーター
危機管理室。

森井 課長

消防防災課でございますので。

住田 コーディネーター

消防防災課。

森井 課長

お問い合わせをいただきましたらまたご連絡を申し上げます。またそれぞれの市町村で自主防の育成のための様々な研修でありますとかですねそういったこともやっておられます。いろいろ取り組みの度合いには差はあるかも分かりませんが、自主防を持ってる市町村は中の活動をされておられますし、また私どものほうでも直接自主防災組織のリーダーの方を養成するような研修会も府立の消防学校を使ってやったりもやらしていただいておりますので、もしそれぞれ更に取り組みを充実をと、あるいはこれから新しい組織をとということでありましたら我々行政のほうにお問い合わせをいただけたら何なりと対応をさせていただきますのでよろしく願いをいたします。

住田 コーディネーター

さあ、時間になりました、今日はほんとに皆さんからいくつかのヒント、もっともっと深いお話を伺いたかったんですけども、時間の制約がございますので一応ここでピリオドを打ちたいと思います。あの私、実はある年配の方が多いといわれる中で大学生のですね、防災に非常に関心のあるグループのところに行ったんですね。そこでちょっと阪神大震災のときの写真をですね、みんなで一緒に見る機会があったんですが。建築系で防災にすごく頑張っていた彼がですね、この写真見てどう思うかってディスカッションした時にですね、「僕は初めて人の写った写真を見た」って彼は言ったんですね。つまり彼おそらく建築系だったりするとですね、いろんな建物がどう崩れたかとかですね、どういう力が加わったからだって分析は一生懸命やってるんですけども、人がちょっと写り込んでた、困った顔をした途方にくれた人たちが写り込んでる。私非常に大切なのは人の命をまずどう守るかということにあります。もう1つ防災に非常に熱心な学校に僕行ったことがあるんですけど、これ以上何をしましょうかっていうぐらい全部メニューをやってらっしゃるんですけども、僕はそこで何を言うかと思って1つだけじゃあ言うとしたら、あの阪神・淡路の時に多くの人亡くなって私たちは実はいろいろ頭では分かってるんだけど、悲しみ辛さ、人を失った、地域で人を救えなかったっていう悔しさってそのものすごい心のダメージの中からスタートしたこと思い出すんですね。ですから必ずその人の死という悲しみと直面しなきゃいけないということを今まで被災した人たち全部経験してるんだと。だから今までどうして人が亡くなったのか、それを起こさないためにどうしたらいいのかってその出発点をですね、是非皆さんそれも加えていただければなと。よく修学旅行では、語り部

さんに 15 分聞いてはい次行きます、人と防災未来センター次行きますみたいな感じなんです、実はその人のその悲しみの経験というのを 1 つのコアにするということも大切なんじゃないかなというふうな気がいたします。今日は長い時間でありましたけれども、お聞きいただいた皆さんほんとにありがとうございました。そしてパネリストの皆さんありがとうございました。拍手を送りましょう。

添田 キャスター

ありがとうございました。パネリストの皆様にもう一度大きな拍手をお送り下さいませ。ありがとうございました。それではフォーラムの閉会にあたりまして、大阪府総務部危機管理室長 飯尾 慎太郎よりご挨拶させていただきます。

大阪府総務部危機管理室 室長 飯尾 慎太郎

ご来場いただきました皆様、また講師の先生方、並びにコーディネーター、パネリストの皆様方には本日は長時間に渡りましてこのフォーラムにご参加いただきました。誠にありがとうございます。主催者を代表いたしまして心から厚く御礼を申し上げたいと存じます。最近、昨年の岩手・宮城大地震、あるいは中国四川の大地震など自然災害が多発している中にありまして、そういう中にありまして近い将来必ず発生するといわれております、東南海・南海地震を想定いたしまして、地域防災力を高めるためにはどうしたらいいのか、地域の防災教育、あるいは防災啓発をどうしたらいいのかということと共に考えるきっかけの場を作りたいということでこのフォーラムを開催させていただきました。災害が起こりますと当然のことでございますけども、消防や警察、自衛隊、行政を挙げてですね、救助や災害の復旧復興に取り組むわけでございますけども、真っ先に災害に向かい合うこととなりますのは、これも言うまでもございませんが、それぞれの地域でありまた府民 1 人 1 人の方でございます。そういう中にありまして先ほど申し上げました地域の防災力を高めていくということが非常に重要な事になつとります。本日のフォーラムではそれぞれの分野、防災研究、あるいは学校、あるいは行政の立場から大変貴重なご意見をいただきました。このご意見、提言を皆様方それぞれご家庭なりあるいは学校、あるいは地域にお持ち帰りいただきまして今後の地域の防災力の強化に努めていただきますよう、改めましてお願い申し上げまして簡単でございますが閉会に当たってのご挨拶とさせていただきますと存じます。本日はほんとうにありがとうございました。

添田 キャスター

ありがとうございました。以上を持ちまして「防災教育推進フォーラム」を終了させていただきます。皆様長い時間に渡りましてお付き合いいただきまして、ありがとうございました。お帰りの際アンケート用紙をお出口の回収ボックスに入れていただきますようお願いいたします。お忘れ物のないようにお気をつけてお帰り下さいませ。本日は誠にありが

とうございました。

閉会